教育協議会研究

○2025年度 東山梨教育協議会研究の概要 ……59

【教育研究会研究】

国語科　小学校 ……63
　　中学校 ……65
外国語 ……67
社会科 ……69
算数数学　算数 ……71
　　数学 ……73
理科 ……75
音楽科 ……77
図工・美術科 ……79
技術科 ……81
家庭科 ……83
保健体育科小学校 ……85
保健体育科中学校 ……87
保健教育 …… 89
生活科 ……91
自治的諸活動と生活指導 ……93
特別支援教育 ……95
福祉教育 ……97
食教育 ……99
平和・人権教育と国際連帯 …101
環境教育 ……103
情報化社会と教育・文化活動‥105
進路教育 ……107
保護者・地域住民との提携 …109
教育条件整備 ……111
カリキュラムづくりと総合学習 ‥113
教育評価 ……115

２０２５年度　東山梨教育協議会研究の概要

研究推進委員長　若月　敬二郎

Ⅰ　はじめに

東山梨教育協議会は、東山梨地域全体の教育振興を願って、1964 年（昭和 39 年）に校長会・教頭会・教連の三者が一体となり、県教委、各地教委の協力により設立された。これまでの活動の中で、私たちは「人間性豊かな子どもの育成とその学習を保障する教育活動の探究」を目標に、今日的な課題の解決にむけてとりくんできた。また、管理職・教諭・専門職員が協働して組織研究をすすめ、東山梨地域の学校教育の向上、教職員個人の資質の向上、教職員相互の強固なネットワークの構築をはかり、今に至っている。

一方で、子どもたちや学校教育をとりまく状況をみると、多くの課題が山積している。2024 年度、文部科学省調査によると、不登校の子どもの数は、小中学校、高等学校ともに前年度に比べて増加傾向にあり、小中学校で34万6482人となっている。とりわけ小中学校の増加率は前年度比から15.9%増となっており、過去最多となっている。山梨県内でも過去最多の 2,327 人となった。その他にも、いじめ、自死、ヤングケアラーなど、子どもたちをとりまく「問題」の背景には、様々な要因が複雑に交錯しており、学校・地域・社会全体で根本的解決をはかる必要がある。

教育は、子どもたちのウェルビーイングにつながるものであり、一人ひとりの権利が尊重され、自己実現につながるものでなければならない。そのために、学校や社会がどうあるべきかを、子ども・保護者・地域とともに考えていくことが大切である。

本協議会では、2020 年度より新しい形の研究体制の構築、発展的再編を行い、課題改善へと歩みをすすめてきた。また、今年度は教育研究の DX 化をさらに前進させ、効果的で効率的な研究体制の構築をはかってきた。一方で、教育活動は時代とともに変化していくことが必要だが、ただ時代の変遷に流されるのではなく、我々は、教育の不易と流行をしっかりと捉えた教育研究を行っていかなければならないと考える。子どもたちを中心に据え、学校・家庭・地域に根ざした「心豊かなふれあいのある教育」、「誰一人とり残さない」という SDGs の理念を踏まえたインクルーシブな学校づくり、組織研究の体制を東山梨の教職員が一丸となってすすめていきたい。

Ⅱ　研究の推進について

１　研究の目標

「人間性豊かな子どもの育成とその学習を保障する教育活動の探究」

２　研究推進の基本的方針

(1)１９６４年発足より半世紀以上が経過した歴史的重みや意義を重視し、東山梨の抱える今日的な教育課題解決のための研究を推進する。

(2)教育課程（カリキュラム）の自主創造的な編成にとりくむ。

(3)各学校の校内研究と教協研究との有機的結び付きとその充実をはかる。

(4)保護者・地域住民との連携を強化する。

(5)組織研究の意義を理解し充実発展させるために、積極的な参加意識の高揚と組織的参加体制の確立をはかる。

(6)平和・人権・環境教育を積極的に推進し、生命の尊さや平和の大切さの意識高揚をはかる。

(7)教協会員数減少への対応、働き方改革の視点から行った教協改革を確実にすすめ、教協研究の更なる充実をめざした新たな教協体制を確立させる。

3　研究の組織づくり

研究の基底は校内研究にあるとの認識に立ち、課題の本質に迫り、解決の方法・内容を考えたり、専門的力量を高めたりする教育研究会と、同じ地域に勤めるものが課題を共有し、連携をはかりながらその解決策を探るブロック交流研究会、さらに特別委員会を設け教協研究の推進をはかった。以下、具体的に掲げる。

（１）教育研究会

共通テーマ：「人間性豊かな子どもの育成と教科教育課程の自主創造的な編成をめざし、教育の本質を実践的に追究する。」

	研究会名		部長	学校名	テーマ
1	国語科教育	小学校	奥石晴美	井尻小	思考力・判断力・表現力を育む国語科の指導 ～系統性を意識した授業づくり～
		中学校	天野綾美	松里中	主体的・対話的で深い学び実現する国語科の指導 ～言語活動の充実を通して～
2	外国語教育		益田宗士	松里中	主体的に英語学習に取り組む児童・生徒の育成 ～伝える力を育む～
3	社会科教育	小学校	山本諭	玉宮小	市民を育てるための「主体的・対話的で 深い学び」をどのように実現するか
		中学校	内田英太	松里中	市民を育てるための「主体的・対話的で 深い学び」をどのように実現するか
4	算数・ 数学科教育	算　数	深澤侑太	大藤小	つくり、いかす算数授業の創造
		数　学	名取政也	笛川中	わかる授業の工夫と授業実践 ～基礎学力の定着と考える力の育成～
5	理科教育	小学校	佐野誠一	奥野田小	わかる理科授業の創造 ～楽しく学び、自然を豊かにとらえる 理科授業をどのようにすすめるのか～
		中学校	池田大誠	勝沼中	楽しく学び、自然を豊かにとらえる理科授業の創造
6	音楽科教育		平井祥子	笛川中	確かな学び　広がる音楽 ～知覚・感受をもとにした音楽的思考力・ 判断力・表現力等の育成～
7	美術・図工科教育		菊島美香	塩山中	一人ひとりの力を引き出す 題材をどうつくっていくか ～感動と発見のある授業づくり～
8	技術科教育		岡田強	勝沼中	「つながり」を深め、資質・能力を育む技術科教育
9	家庭科教育		小沢みどり	塩山南小	「つながり」を深め、資質・ 能力を育む技術家庭科教育
10	保健体育科教育 （小学校）		鈴木陸人	日川小	教材の本質をふまえた体育指導のあり方 ～体つくり運動を通して～
11	保健体育科教育 （中学校）		三枝まり子	松里中	生きる力を育てる保健体育学習を目指して ～基礎的・基本的な知識・技能の 習得のための学習指導の在り方～
12	保健教育		上治真央	岩手小	自らの健康づくりに意欲的に 取り組む子どもをどう育てるか

13	生活科教育	矢崎さつき	塩山南小	子どもが生き生きと学ぶ生活科 ～主体的・対話的で深い学びを 引き出すための手立てを通して～
14	自治的諸活動と生活指導	橋本耀太	日下部小	一人ひとりを大切にした学級づくり
15	特別支援教育	丸山英子	日下部小	自立をふまえて（どの子も共に生き、共に育つ） ～一人ひとりの実態をふまえた 支援と指導のあり方～
16	福祉教育	深澤有菜	塩山南小	学校教育における福祉教育のあり方を探る
17	食教育	深澤智子	山梨南中	食生活を考える ～子どもたちのより良い食習慣づくり～
18	平和・人権教育と国際連帯	三枝洋介	塩山中	平和・人権教育と国際連帯の広がりをめざして
19	環境教育	松岡めぐみ	加納岩小	「自然との共生」をめざした「環境教育」のあり方 ～身近な環境や自然に対して 主体的にかかわる子どもの育成～
20	情報化社会と教育・文化活動	山内要保	東雲小	情報活用能力を高める研究
21	進路教育	雨宮正	奥野田小	一人ひとりにあった生きる力をつけるための 進路指導・キャリア教育はどうあるべきか ～小・中学校の実践を通して～
22	保護者・地域住民との提携	金子佐由美	笛川小	地域とともにある学校づくりをめざして
23	教育条件整備	大島達也	祝小	豊かな教育を子どもたちに
24	カリキュラムづくりと総合学習	鶴田真紀子	日下部小	豊かな学びを創造するゆとりある 教育課程の編成と実践
25	教育評価	高野恵美子	日川小	「生きる力」をはぐくむ評価のあり方

（2）ブロック交流研究会

共通テーマ:「地域が抱える教育課題を共有し、解決にむけた交流を行い、同一地域の小中連携や小中の系統的な教育のあり方を追究する。」

ブロック名		ブロック長	ブロックテーマ
山梨支会	山梨南ブロック	望月清美（日川小）	ＩＣＴの活用と小中連携
	山梨北ブロック	石井美保（山梨北中）	小・中の連携を深め、山梨北ブロックの児童・生徒の指導に生かす
	笛川ブロック	名取政也（笛川中）	義務教育学校へ向けた小中連携とICTの活用と推進
甲州支会	塩山ブロック	池田理恵子（塩山南小）	小中の連携を深める中で、系統性をつかみ授業に生かす
	松里ブロック	竹川佳那（松里中）	地域で育てる・地域を知る・学び続ける ～同じ地域に学ぶ子供たちの教育のために、 小・中・地域の交流と連携を深めよう～
	勝沼ブロック	中根淳（勝沼小）	甲州市「夢をかなえる学びのプロジェクト」との連携を図りながら、同じ地域に生活する児童・生徒に対する系統的な教育の在り方を考える

（3）特別委員会

ア　教育環境研究特別委員会（委員長 立川慶樹　委員…校長会・教頭会・教連・事務職）

イ　児童生徒連絡協議会（会長 塩山中学校生徒会会長 小川莉央　顧問教員 佐藤政幸）

4　研究会運営

本年度は、25の教育研究会、6のブロック交流研究会を設定した。教育研究会は年間8回、ブロック交流研究会は年間2回設定し研究活動を行った。年間計画等しっかりとした見通しの上に立っての研究活動をさらに推進していくことが重要である。

5　研究日と研究集会

毎週水曜日を研究日とし、地区教協研究日以外は校内研究にあてる。厳に校内行事等を入れずに研究時間を確保するようにしたい。春季・秋季・冬季教育研究会は27校の教職員が一堂に会し開催された。

6　研究推進地区

甲州支会を研究推進地区とし、塩山南小学校を会場に各種教研活動を行ってきた。

7　教育講演会

8月8日（金）山梨市民会館

講師：歌語りシンガーソングライター　山本 晴美 氏

演題：「歌語り『万歳峠』　～山梨から鹿屋へ 故郷を思い飛び立った若き魂へ～」

Ⅲ　今後の課題

加速する時代の変化に伴い、時代のニーズに合った教育活動をすすめていく必要に迫られている。その中で、教職員の多忙化改善の視点に立った新しい形の研究体制や教育研究のDX化にとりくみ、様々な教育課題解決にむけて、私たちはさらに質の高い研究活動をすすめていく必要がある。そのためにも、トップダウンの教育実践ではなく、目の前の子どもたちの実態を的確に捉えた上で、本当に必要な教育とは何かをもう一度見つめ直す必要がある。目の前の子どもたちが、夢と希望をもち、瞳を輝かせて学び合えるような教育活動をめざして、仲間とともに教職員としての専門的な力量を高める組織研究をすすめていきたい。東山梨教育の長い歴史の中で、先輩方が積み上げてくださった私たちの組織研究に誇りをもち、一人ひとりがその意義を自覚する中で、東山教育がさらに充実・発展するよう努めていきたい。

〈東山梨教育協議会役員〉

役職名	氏　名
会　長	中村　直人（奥野田小）
副会長	辻　由樹（東雲小）　前田　大輔（山梨南中）
事務局	若月敬二郎〈研究推進委員長・事務局長〉（後屋敷小） 保坂　洋仁〈事務局次長〉（勝沼小・教育会館）
委　員	中村　直人（奥野田小）　日原　英二（山梨小）　清水　誠治（日川小） 伊藤　淳司（塩山北小）　鈴木　学（井尻小）
	辻　由樹（東雲小）　山宮　武徳（日下部小）　佐久間　覚（菱山小） 數野　透（松里中）　田邉　珠紀（塩山南小）
	前田　大輔（山梨南中）　広瀬　竜太（笛川中）　若月敬二郎（後屋敷小） 中村　大介（勝沼中）　保坂　洋仁（勝沼小・教育会館）
会　計	中村　大介（勝沼中）
会計監査	廣瀬　敦子（松里小）　藤原　祐喜（山梨小）　関口　哲也（日下部小）

思考力・判断力・表現力を育む国語科の指導

～読むことの系統性を意識した授業づくり～

Ⅰ 研究テーマについて

今日の小学校教育における国語科「読むこと」の学習指導では、言語活動における協働場面の質を高め、児童の資質・能力を確実に育成することが実践上の課題となっている。国語科「読むこと」の学習指導では、思考力、想像力の育成が目指されている（文部科学省、2018）。こうした中で、中央教育審議会（2016）は、授業改善の方向性の1つとして、「対話的な学び」の視点から言語活動を充実させ、学びの質を高めることで、児童の資質・能力の確実な育成を求めている。

上記をうけ、「読むこと」の領域においては、文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方を改め、基礎的な内容を繰り返し学習し、確実に言語能力を育成することを重視して改善が図られてきた。加えて、学習者重視の授業への転換により、読みの意欲を高める授業方法が工夫されてきた。しかし、主体的な学習を目指すことにばかりとらわれ、表現活動にのみ重きを置いた指導展開が多く見られ、伝え合う力をはぐくむまでには至っていない。このような現状を踏まえ、授業を通して一人一人の読みの力を確実に身に付けさせながら読みを深める指導方法の改善が必要だと考えられる。

今年度、本研究会では読む力をつけるために、説明的文章を読む目的や価値を明らかにし、小見出しをつけたり、意味段落の役割を確認したりするなどして、段階を経て読み取れるような指導を工夫していきたい。また読む力をつけていくために、単元の中で特に押さえるべき内容をどのように取り組んだか、今後の授業や次の学年にどのようにつながっていくかについても研究していく。

Ⅱ 研究の内容について

1 研究方法

（1） 実践交流・・・国語科の学習で思考力・判断力・表現力を育むための指導をどのように行ったか実践を発表し合い、交流する。

（2） 理論研究・・・教育センターの先生より、国語科の「読み」の学びが、中学校へとどのようにつながっていくかの理論研究をする。

Ⅲ 成果と課題

1 成果

・自分たちが持っている授業づくりのアイディアを出し合い、自由に考えを交流できる部会の雰囲気が研究の深まりにつながった。

・実践発表等を通して、思考力・判断力・表現力を育む指導方法について学べた。

・読む力と語彙力の関係について理解が深まった。

・それぞれの実践から、自身の学級に生かしたいことも多くあり、日々の積み重ねの大切さを学んだ。
・児童にどんな力をつけさせたいか目標を大切にし、児童にあったいろいろなアプローチが大切なことを学んだ。
・多様な実践を聞く中で、発達段階に応じた効果的な指導や学びを段階的なつながりを理解しながら学ぶことができた。
・説明的文章に絞って実践交流をしたことで、学年の発達段階をより授業の中で意識することができた。
・今後も「思考力・判断力・表現力」を意識した授業を行い、自身の資質向上を目指したい。
・系統性ということで、クラウドツールを単元ごとに分けず、まとまりでわけると、既習事項の振り返りになり、学ぶ内容と結び付けやすくなることを学んだ。
・説明的文章を読むうえでのポイントを押さえて、日々の実践に生かすことができた。
・教育センターの先生からお話を聞けたことで、授業づくりをはじめ、小学校1年生の学びが高学年、そして中学校へと系統的につながっていることを改めて実感できた。
・個別最適な学びやICTの活用の活用は、低学年のころから行うことができ、ねらいにあうように活用することで、大きな効果を出すことがわかった。
・ICT端末を効果的に取り入れた授業づくりについて理解を深めることができた。
・授業の中での生成AIの使い方について情報交換ができた。
・国語科としての指導方法だけでなく、「ICTの活用について」「教師からの声かけについて」の話や、管理職の先生方から指導があったことで、実践発表が報告に終わらず、深く研究ができたのではないかと思う。

2　課題

・副題については学べたが、「思考力・判断力・表現力」の育成という点では、もっと深く研究していきたい。
・読むことの系統性が教材そのものなのか、教科として育てたい資質なのかが曖昧なまま実践してしまったのが課題だった。
・自身の授業における「見取りの視点」や「教師の振り返りの視点」が足りなかったと思う。
・受け持つ学年が異なる教員が所属している部会なので、より系統性を意識した研究ができれば、さらに研究が深まっていくと思う。
・教科書の各学年の教材を見て、どんなつながりで学年ごとに学びが進んでいくのか、学習する時間があってもよいと思う。
・協議内容の蓄積を進めたい。協議内容を次時に振り返ること、夏季学習会の資料の読み返しをすることや夏季学習会で得られた知識を後の研究に具体的に生かしていくことが大切だと思った。

（部長　輿石晴美）

国語科教育（中学校）

主体的・対話的で深い学びを実現する国語科の指導

～言語活動の充実を通して～

Ⅰ　研究の内容

本研究部会では、「主体的・対話的で深い学びを実現する国語科の指導 ～言語活動の充実を通して～」をテーマに掲げ、研究を進めてきた。現代社会において、情報を鵜呑みにせず自己の学びを調整し、他者との対話を通じて納得解を導き出す力は、これまで以上に重要となっている。

本年度は、多くの生徒が苦手意識を抱く「書くこと」に焦点を当て、特に「推敲」の技能向上による「書く力」の育成に取り組んだ。全国学力・学習状況調査の結果から、推敲が本県の課題であると示されていることを踏まえ、「読み手の立場に立って文章を整える」という具体的な言語活動を設定した。指導にあたっては、Google ドキュメントのコメント機能を活用して相互に助言し合う活動を仕組み、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指した授業実践を展開した。

Ⅱ　成果と課題

指導案を部会全体で練り上げたことにより、推敲指導のノウハウを深く共有することができた。一つの授業を全員で構築するプロセスは、個々の実践へ即座に還元できる確かな強みとなった。また、「目的・相手・基準」を明確にすることが、課題設定や評価の焦点化に不可欠であることを再確認した。実践においては、Google ドキュメントのコメント機能を活用することで、発言に抵抗がある生徒も意欲的に対話へ参加する姿が見られた。これにより、ICT が「個別最適な学び」や「新たな対話の形」を実現する有効な手段であることを実証できた。時間を割くことが難しい「書くこと」にじっくり向き合ったことは、推敲によって文章がより良く変わる楽しさを実感させ、書くことに苦手意識を持つ生徒の変容と成長を引き出す貴重な機会となった。

一方で、評価基準の提示方法は依然として難易度が高い。授業のねらいに応じた要素（内容・構成・表現等）のバランスを、構想段階から部会全体でより深く議論すべきであった。基準を精緻化することで、生徒への指示や支援もさらに具体的になったと考えられる。

また、生徒の実態に応じた支援も不可欠である。記述量の少ない生徒への手立てや、ICT と紙媒体の併用による混乱を防ぐシンプルで機能的な環境づくりが求められる。

今後は国語科の枠を超え、他教科や学級活動など日常のあらゆる場面で生徒が「書くこと」に取り組めるよう、部会としての発信力を高めていきたい。

Ⅲ 成果物（学習指導案の概要）

1．単元名

読み手の立場に立って、文章を整えよう

～表現の効果などを確かめて、読みやすく分かりやすい文章にする～

2．本時のねらい（第４時／全５時）

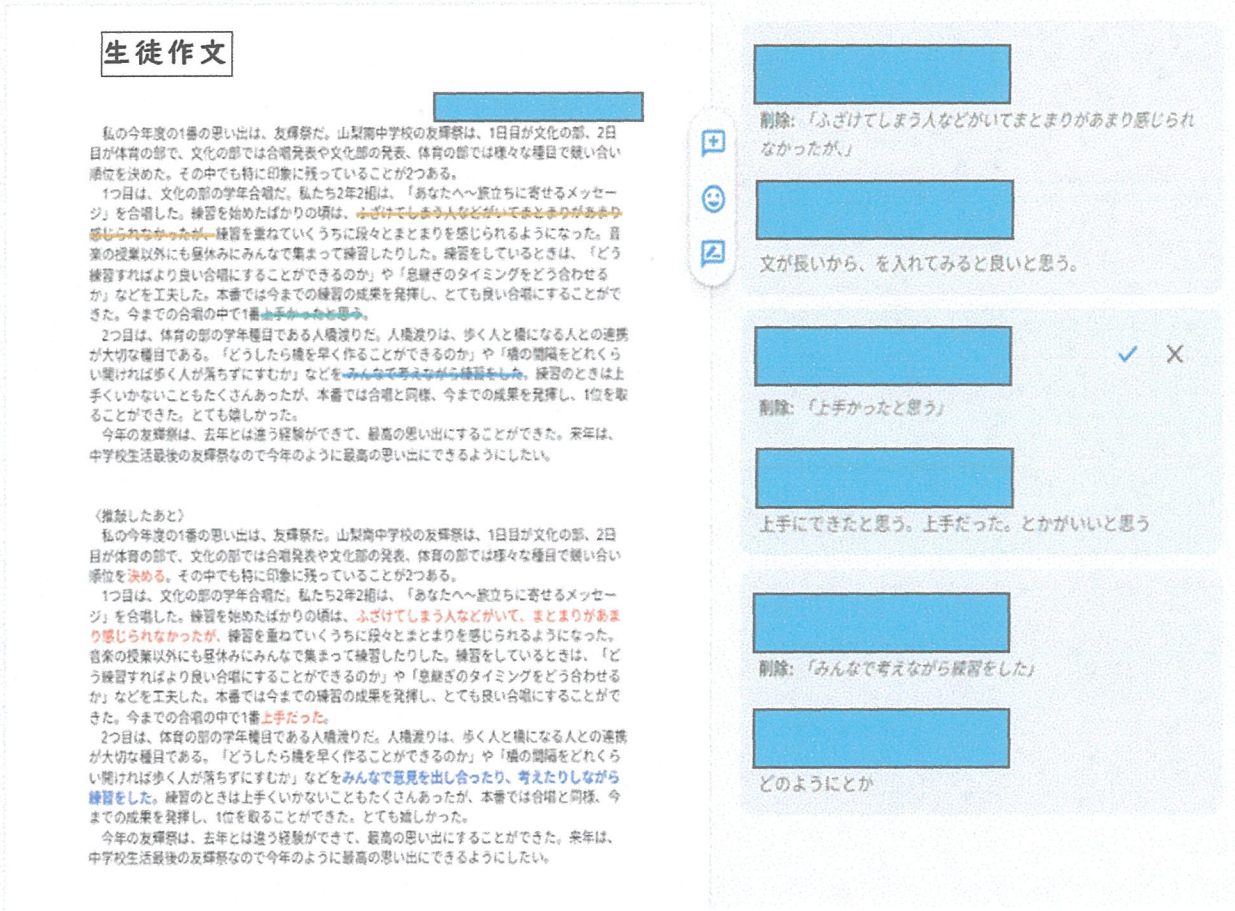
推敲の基準に基づき、読み手の立場に立って自他の文章を整える。

3．学習の展開（要旨）

- 導入：本時の課題と推敲の基準を確認する。
- 個人思考：自分の生活作文を読み、不自然な箇所を修正する。
- 対話：班員の作文を読み Google ドキュメントのコメント機能で添削しあう。
- 終末：アドバイスを参考に修正の方向性を決め、振り返りを行う。

4．推敲の基準

- 基準１：誤字脱字、送り仮名、主語・述語の対応など、形式面が整っているか。
- 基準２：指示語や接続詞、語彙の選択が適切で、読み手に意図が伝わるか。



指導案　　成果と課題　　振り返りシート

（部長　天野綾美）

外国語教育研究会

主体的に英語学習に取り組む児童・生徒の育成　～伝える力を育む～

Ⅰ　主題設定の経緯と理由

本研究会では毎年、研究会で学んだことを授業で活かせるように、研究会員による具体的な実践報告、およびその検討を主とした研究を行っている。

本年度も昨年度と同様、「主体的に英語学習に取り組む児童・生徒の育成～伝える力を育む～」を研究テーマとして、小中連携という視点も踏まえ、小学校の教員と中学校の教員とで同じテーマのもと、研究を進めていく。

令和３年度から令和５年度まで３年間は、「書くこと」「話すこと(発表)」「話すこと(やりとり)」に焦点を当て、研究を進めてきた。サブタイトルを「表現につなげる活動の工夫」とし、研究授業にあたっての共同指導案や学年ごとの教材を作成し、共有する研究を行った。

そして、昨年度はサブタイトルを「伝える力を育む」とし、いかに児童生徒が英語に親しみ、英語学習へ主体的に取り組む態度を育成するか、そして英語学習の基盤である語彙指導などを研究した。それにあたり、個別最適・協働的な学びの視点やICT機器の利用についても考慮しながら、児童生徒が英語を学ぶ中で達成感が得られ、次の学習へとつながるように指導するために必要なことを考え、研究会で協議した。

本年度の研究では昨年度の研究を引き継ぐ中で、英語の学習を通して、児童・生徒が自身の考えやメッセージを伝えられる力をどう育むか、ということを研究していきたい。そして、昨年度課題に挙がった、『児童・生徒が主体的に取り組みたいと思う、目的・場面・状況を踏まえた課題設定』についても深めていく。児童・生徒にとって魅力的な課題設定を意識した教材や授業づくりをする中で、工夫したポイントや児童生徒の学びの変容について、研究会で共有していきたい。それにより、互いの実践を知ることができるだけでなく、次の日の実践に結びつけられる材料が増え、児童生徒に還元できるだろう。また、教師同士の指導力向上へもつながると考える。

英語学習においては、小・中学校の連携を軸に、児童・生徒達が「楽しい」と感じ、「わかった」と思う授業を創造することで、学習者がより主体的に取り組むことができる。また英語を使って理解できた、意思疎通ができたという達成感が大切になる。そのためには相手に伝えたいと思える課題を設定し、児童生徒が主体的に英語を使って考え、その課題に向かって活動を仕組んでいきたいと思い、本研究テーマを設定した。

○研究の方法

・それぞれの研究会の際に、普段使用している教材を持ち寄り、全体やグループごとに共有した。

Ⅱ　研究の内容

・授業研究会（統一授業研にむけての指導案検討や各先生方の授業実践を含む）

・講師招聘による講演会や学習会

・日々の実践共有と意見交換

1 授業実践研究

・第1回統一授業研究会 塩山中学校　加藤 涼子先生

・第2回統一授業研究会 加納岩小学校 筒井 栄太先生

2 実践共有等

各学校の研究会員が、日々実践していることを持ち寄り、議論を行った。その中で多く上がっていたのが、「目的・場面・状況にあった言語活動の課題設定」「コミュニケーションの中で伝わることの達成感とそこに導くための工夫」「中間指導の重要性」だ。それらについて研究会員同士でアイデアを出し合い、それぞれの日々の実践へとつなげることができた。

Ⅲ 成果と課題

1 成果

昨年度に引き続き、本年度も小中相互の授業公開や実践共有を通じ、児童生徒が目的意識を持って英語で「伝えよう」とする主体的な姿が見られた。特に研究授業では、言語活動の設定や授業構成を検討したことで、自分の考えを表現しようとする意欲的な態度の育成が図られた。また外部講師を招いた講演・学習会が実施でき、専門的な視点から研究テーマへの理解を深めることができた。小中連携の視点を持って授業改善を継続したことが、伝える力の向上に繋がった。

2 課題

実践共有だけでなく理論研究の深化が挙げられる。具体的には、書籍やウェブ上にある実践に対しての議論や「伝える力」の見取りや評価に関する研究を深める中で、個々の実践と理論を繋げられる研究の推進を図りたい。また研究会の人数が年々減少していることから、甲州市の授業時数特例校制度の導入を機に、小学校3、4年生の外国語活動の授業に携わる先生方も広く巻き込み、多様な視点から研究を行っていきたい。

3 授業実践を通して

外部講師の招聘や日々の授業実践を基にした研究を通じ、児童生徒が学習目的を意識し、自らの思いを英語で「伝えよう」とする主体性の大切さを共通理解することができた。目的だけでなく、場面や状況、相手を意識した課題や活動を設定し、児童生徒に取り組ませることで、「伝える力」が育まれていくことを共有できた。また、小中それぞれの指導案を共同検討し、両方の授業を研究することができたからこそ、学習の深化につながったと考える。

Ⅳ 成果物

・第1回統一授業研究会 指導案や資料

・第2回統一授業研究会 指導案や資料

・日々の実践に使用している教材等（一部抜粋）

いずれも右のQRコードよりご覧いただけます。

社会科教育研究（小）

市民を育てるための「主体的・対話的で深い学び」をどのように実現するか

Ⅰ　主題設定に関わって

1「市民を育てる」について

・現代の課題に迫る SDGs の視点や、平和・人権、公共心や多様性の尊重等に焦点を当て、現在の社会の現況や課題を認識し、未来の社会を担う市民としての在り方を判断する子供の育成を目指す。

2「主体的・対話的で深い学び」について

・子供たちが、社会の問題点を主体的に捉え、自ら考え、行動する意欲を持てるよう、学習課題や地域素材について研究を深める。

・上記の研究を進める中で、授業の中でどのように「主体的・対話的で深い学び」を実践していくのか追究する。

・問題解決的な単元構成で、子供たちが社会的な問題や課題に対して、主体的に探究し、解決策を見出す力を育むことを目指す。

3「市民」としての資質・能力とは、

① 情報を的確に読み取り、根拠に基づいて思考するとともに、異なる意見を比較・検討しながら公正に判断し、自らの立場や考えを形成すること。

② 社会の仕組みやルールを理解するとともに、政治・経済・歴史などを多面的に捉え、地域や社会に存在する課題に気付くこと。

③ 法やルールを遵守しようとする態度を基盤とし、他者や社会全体を大切にするとともに、人権や多様性を尊重すること。

これらの基礎を養うことが、社会科としての学びである。研究会の中でそのための手立てと有効性を共有し、これからの社会科教育の発展につなげたい。

Ⅱ　研究内容について

（１）社会的事象の教材化

（２）教師の効果的な指導や支援（発問、板書、資料の活用方法、ICT 機器の活用等）

（３）社会認識の深まりの見取り（学習の評価）

（４）授業の振り返り（授業の評価）

（５）言語活動の充実（位置付け、内容）

Ⅲ　成果と課題

1　成果

（１）限られた日程の中ではあったが、研究を効率的に進めることができた。

（２）研究授業では、生徒が主体的に課題へ取り組み、ICT や地域素材を活用した「主体的・対話的で深い学び」の実践を行うことができた。

（３）研究テーマに沿った授業案の検討も十分に行うことができた。

（４）夏季学習会での講義内容と研究授業とが結び付き、理論研究を授業実践へと具体化する取組が、学習に生かされる実践となった。

2　課題

（１）研究を継続・充実させていくための課題として、研究に携わる人数の確保が挙げられる。小中合同で研究を推進するためには、より多くの会員が参画し、役割を分担しながら組織的に取り組むことのできる体制の構築が求められる。

（２）発達段階に応じた指導内容や学びの深まりについての共通理解を、より広げていきたい。

（小学校部長　山本　諭）

社会科教育部会

市民を育てるための「主体的・対話的で深い学び」をどのように実現するか

Ⅰ　主題設定の理由

昨年度同様、市民を育てる「主体的・対話的で深い学び」を得るために、必要な手段及び方法を研究することとした。研究会の回数も少ない中ではあったが、小中合同の研究授業、指導案検討、臨地研修等を行い、次のような生徒の育成に繋がるものとして進めた。

① 学習課題に対し、主体的な学びに向かうことのできる生徒
② 追求すべき課題を明確にとらえることができる生徒
③ 他者と協働し対話的な学びから考えを深めることのできる生徒
④ 導き出した結論を、様々な資料や他者の意見を参考にしながら検証することのできる生徒

昨年度に続き、ＩＣＴを活用した「主体的・対話的で深い学び」の実践や単元を貫く課題を設定し、単元を通して深い学びが達成できる授業づくりに力を入れた。「主体的・対話的で深い学び」を実現するための手段や方法を研究し、予測困難な時代であっても自ら課題解決ができる市民として、生徒を育成していくことが重要であると考え、研究を進めた。

Ⅱ　研究内容

1　授業研究の実施（小中合同）

1月　大村　公紀　教諭（笛川中）

中学２年生 地理的分野　題材：「地域の在り方」

2　臨地研修

8月　「世界農業遺産について」　（講師 農学博士　澤登早苗 氏）

Ⅲ　成果と課題

・身近な地域を題材にすることで、生徒が学習を自分事として捉え、主体的・対話的で深い学びの実現に有効であった。
・デジタル学習基盤の利活用や教員間での授業検討を通して、課題設定の質や指導技術の向上が図られた。
・今後は、ＩＣＴ活用が思考の深化に与える影響を具体的に検証し、実践を日常の授業へ定着させることが重要である。
・小中合同で研究できることを生かした研究を、今後もより一層考えて取り組んでいきたい。

（中学校部長　内田　英太　松里中学校）

算数科教育研究会

つくり、いかす算数授業の創造

○子どもたちが主体となり、数学的表現を通して関わり合う授業づくり
○算数を活用する意識や実践力を育てる「生活・社会とつながる教材」の研究と実践

Ⅰ　研究テーマについて

小学校学習指導要領では、算数的な活動の充実や数学的思考力・表現力を生活のなかで活用しようとする態度の育成が示されている。算数を学ぶ意欲を高め、学んだことの意義や有用性を実感できる授業を実践し、コンテンツベース（内容中心）からコンピテンシーベース（資質能力中心）へ授業改善をすすめていきたい。また、授業において、数学的な表現（言葉・式・絵・図・操作）を用いて考えたり、説明したりすることで、学習や生活で活用できる力を育めるよう研究をすすめてきた。

Ⅱ　研究の内容

1　授業実践研究

	日　時：令和７年９月１０日（水） 場　所：塩山南小学校２年３組教室 授業者：廣瀬 大起　教諭 たし算とひき算のひっ算	日　時：令和８年１月２８日（水） 場　所：加納岩小学校３年１組教室 授業者：中田 菜穂子　教諭 分数を使った大きさの表し方を調べよう
成果	・既習事項が身に付いていることもあり、これまでに学習してきた筆算について端的に復習することで、本時の課題を掴むことができていた。 ・学習規律がしっかりしており、自由進度学習を行える素地が身に付いていた。 ・FigJamやプリントの学習ツール、「ひとりで」「ともだちと」「せんせいと」の学習形態の選択に慣れていて、課題解決に向けて考えをまとめられていた。	・「既習を活かして考える」ということが徹底されており、その視点では、とても整理されていて、児童が思考を進めやすい活動となっていた。 ・比較検討や既習事項（小数）との関連で理解が深まっていると感じた。 ・児童の言葉を使い丁寧にまとめられていた。 ・ノートを撮影し、スプレッドシートで共有することで学習の変容を確認することができたり、他者参照が容易になったりできた。

課題	・自力解決の時間の確保や途中経過の共有方法について検討する必要があった。	・1/10 をもとにして考えることが徹底されていて「分母を足す」という誤答が起きようがない進め方であったので、「分母を足す」ことが間違いであることを検討する時間がほしかった。

Ⅲ　成果と課題

1　成果

（１）研究授業に向けて、個別最適な学び（学習形態や学習ツールの自己決定）を重視した算数授業の在り方について研究することがで、一斉授業の中で個別最適な学びを確保する大切さを確認し、自らの授業にも活かせた。

（２）授業の振り返りでスプレッドシートを活用することで、他者参照が容易になり、児童の学習に効果的であった。

（３）今年、変則的に２回研究授業を行うことで、次年度から数学部会と相互に授業を参観し、小中が連携し系統性を意識した授業作りの研究を継続できるよう、仕組みを変えた。

2　課題

（１）ICT 活用や個別最適な学びの有用性を実感する一方で、それ自体が目的化してしまうことが課題である。また、思考力や記述力を身に付けさせる指導を意識したい。

（２）教師が介入するタイミングや支援の在り方について、共通理解が十分に整理されていなかった点も課題である。

（３）２本の授業研究は学びも多かったが、慌ただしく大変であった。また、研究授業からまとめるまでの期間が短いことが授業者への負担になると思う。授業研究と各自の実践を共有する時間を設定していきたい。

Ⅳ　理論研究にもとづいた授業実践

1　目の前の子どもの実態や、現場の教育課題を捉えた研究を進めることができた。

2　ノートや板書に子どもたちの意見を残すことや、課題提示や振り返り方を工夫し、変容を捉えやすくなった。

3　ICT を使うことが目的になるのではないと共通理解ができ、効果的に活用するために話し合うことができた。

4　個別最適な学びと協働的な学びを一体的に運用することで、研究テーマに繋がるという認識を深められた。

5　それぞれが自分の考えをしっかり話すことで、良い雰囲気の研究でき、日々の実践に活かすことができた。

（部長　深澤　侑太）

数学科教育研究会

わかる授業の工夫と授業実践
～基礎学力の定着と考える力の育成～

Ⅰ　研究の内容

数学科教育研究会では、「わかる授業の工夫と授業実践～基礎学力の定着と考える力の育成～」をテーマに、児童生徒一人一人が主体的に学び、確かな学力を身に付ける授業づくりを目指し研究を進めてきた。具体的には、各校一実践の形で作業的活動を効果的に取り入れた授業研究を進め、体験的な学びを通して理解の深化と知識の定着を図った。また、ICT 機器の活用や GIGA スクール構想に基づく端末・デジタル教材の効果的な活用方法を研究し、個別最適な学びと協働的な学びの充実を目指した。さらに、統一授業研究においては、研究授業者の指導案検討や研究協議を通して授業改善の視点を共有し、指導方法の工夫や評価の在り方について実践的に検証を行った。これらの取組を通して、基礎学力の確実な定着と、課題を自ら見いだし考え抜く力の育成を図った。

Ⅱ　成果と課題

1　成果

他校の実践や研究授業を通して、多くの学びと気づきを得ることができた。各校の授業実践を知ることで、自校の授業の進度や指導の在り方を見直す機会となり、単級学級校にとっても実践の共有は大きな支えとなった。研究授業では、数学研究会内での具体的かつ多面的な助言により指導力向上につながった。特に ICT や PC を活用した授業実践については、多様な方法に触れることで実践の幅が広がり、今後の授業づくりへの具体的なイメージをもつことができた。一方で、ICT 活用だけでなく、従来の数学的な見方・考え方のよさを大切にする視点についても改めて確認することができた。各校の実践から、学校規模や生徒の実態に応じた工夫の重要性を学ぶとともに、教師自身が育てたい力を明確にもち、粘り強く取り組むことの大切さを再認識する有意義な研究となった。

2　課題

参加者にとって大きな負担なく取り組めた点は成果であった。一方で、記録の蓄積や年度の振り返りについては、クラウドを活用した共有やデータ提出など、効率化の工夫が必要である。統一授業研究では各校に任せる部分が多く、全員で指導案を十分に検討できなかった点が課題として挙げられる。次年度は、研究テーマをより意識した実践交流を行うとともに、記録の共有方法や検討時間の確保を工夫し、意見を深め合えるようにしたい。

Ⅲ　授業実践（成果物）

1　統一授業研

（1）　授業内容

６月の研究会で授業者と単元を検討し、第３学年の「二次方程式」の単元で研究成果となる授業を行うことを決定し、８月の研究会で指導案検討を行った。夏の統一授業研で研究授業と研究会を行った。箱を作成するなど作業的な活動を取り入れた授業を行い、具体物を操作することでイメージがつきやすくし、生徒が意欲的に取り組める授業であった。また、他者参照ができる場面を取り入れ、学びを深められる授業であった。

授業者：小髙　鉄平　教諭　（山梨南中学校）
単元名：３学年　第３章　二次方程式　「二次方程式の利用」
ねらい：【主①】作業活動や考察に意欲的に取り組み、学びを深めようとしている
【思①】事象における数量の関係を的確に表した二次方程式をつくることができる

（2）　研究会より

・箱の作成の場面で、縦の長さは様々な値をとっていいことを確認すると、もう少しいろいろな立体ができた。
・定数と変数に着目する。
・作業的活動を取り入れることで、どこの箇所が何ｃｍになるのかということがイメージしやすい。
・作業的活動により、横の長さを考える際にわかりやすかった。しかし、時間がかかっていたため生徒に考えさせる時間をたくさんとりたい。
・言葉の式はよかった。ただし、出てくる言葉が本当に正しいのかは吟味する必要がある。
・他者参照はしているが、苦手な子は逆に見ない。参照することも大切だと理解させ、普段から見る癖や流れをつくるとよい。
・小さい長方形をつくると切れない場合がある。最初に課題を提示すると回避ができる。
・式の書き方、言葉など普段の授業が大切。
・次回の時間を見通したときに、今回は言葉の式までででもよかったか。

（部長　名取政也）

理科教育部会　【小学校部会】

わかる理科授業の創造

～楽しく学び，自然を豊かにとらえる理科授業をどのように進めるか～

Ⅰ　研究の内容

1　具体的内容

○子ども中心の授業づくり　　○理科教育で何を学ばせるか

○実験工作演習

2　授業実践（小中参観）

第５学年「ふりこのきまり」

授業者　加納岩小学校　五十嵐　裕太　教諭

3　学習会

・「理科教育について」

講師：笛川小　雨宮　正倫

・「最新の実験教材」ケニス株式会社　様

Ⅱ　成果と課題

1　成果

「楽しく学び、自然を豊かにとらえる理科教育をすすめるために、再認識できたこと」として、

①日常生活とのかかわりを大切にするために、具体物を活用することが大切である。

②実物に触れること、自分で実験計画を立てたて検証する活動をすることで楽しく学ぶことができる。

・チャットを活用した即時的な悩み相談や、小中学校の枠を超えた多角的な指導案検討により、教員の教材研究やICT活用の視点を広げることができた。

・外部講師による講習や実験演習を日常の授業に直結させたことで、理論と実践を融合させた質の高い研究体制を構築できた。

2　課題

・本研究における課題として、まず地域特性を活かした教材開発が挙げられる。特に指導に難しさを感じる地学分野等において、峡東地域の事例を取り入れた教材作りや、経験豊富な助言者から実践知を継承する機会の確保が必要である。

・組織運営と研究の還元にも改善の余地がある。小中合同部会ゆえの定員制限を緩和し、より多くの希望者が参画できる体制づくりにも課題がある。また、研究授業以外の参加者にも有益な「特定単元に絞った実験手法・ワークシートの共有」といった、実践的な検討時間の拡充が求められる。

（小学校部長　佐野　誠一）

【中学校研究会】

中学校研究会テーマ

楽しく学び、自然を豊かにとらえる理科授業の創造

Ⅰ　研究の内容

１　理科の学びを支える、教材・教具の発表と検証

各校から授業で実践した教材教具を持ち寄り、研究討議を行った。

２　統一授業研究会の実施と指導案検討

指導者　：　大村　悠太　教諭　（山梨市立山梨北中学校）

指　導　：　第３学年　単元３　地球と宇宙　第２章　天体の１年の動き）

概　要　：　日本の季節の変化について、様々な視点でとらえる授業実践が目指された。生徒の実態に即し、一人ひとり自らの考えを持ち、主体的に授業に臨むことをねらいとして、知識構成型ジグソー法を取り入れた授業が実施された。

Ⅱ　成果と課題

教材・教具の発表と検証では、ICT端末や汎用ソフトの活用実践が多く報告され、新たな活用方法について共有しながら各校に還流された。例えば「LabXchange」のサイトは、振り子の運動における力学的エネルギー保存が分かりやすく可視化され、有用だと感じられた。また、生成AIの活用例として、生徒が入力した振り返りシートから重要語句を強調表示するプログラム事例が紹介された。生成AIの活用が効果的な教育活動に結び付く可能性を示し、今後の参考となる内容であった。

統一授業研では、自分の考えを持って観察・実験に臨む姿勢や、知識を関連付ける力に課題があることを起点に、授業づくりが行われた。「日本に四季があるのはなぜか」という課題に対し、「1.日周運動の経路の変化、2.地軸の傾きと季節の変化、3.季節による気団の変化」の3つの視点からアプローチがなされた。協調学習や多角的な分析を通じ、研究テーマである「楽しく学び、自然を豊かにとらえる理科授業の創造」に近づく実践になったと考えられる。

昨今の教育現場では、ICT活用や自由進度学習など様々な学び方が実践されている。しかし、実物に触れて実感を得ることや、自然事象に対して柔軟な発想で仲間と意見を交わすことは、理科教育において不変の醍醐味である。今後も生徒の学びを第一に考え、理科教育の研究を進めていきたい。

（中学校部長　勝沼中学校　池田大誠）

音楽科研究部会

「確かな学び　広がる音楽」

～知覚・感受をもとにした音楽的思考力、判断力、表現力等の育成～

Ⅰ　主題設定や研究のテーマについて

本研究会では、仲間とともに音楽を表現したり味わったりするために、一人一人がどのような音楽を表したいのかといった思いや意図が出発点となって、仲間とともに共有し、音楽の世界を広げていけるようにすることが重要であることと捉え、授業実践においては感性を高め、思考・判断し表現する「一連のプロセス」を重視してきた。

授業では、音楽のよさがどのような要因から生まれてくるのかを探るために思考し、表現したり鑑賞したりする学習を実現することで、児童生徒の感性が高まり、より深く音楽を表現し味わうことへとつなげるよう、学習を展開してきた。また、児童生徒が取り組みやすさを感じられるようにスモールステップの設定や常時活動、教材や提示資料の工夫をする他、個別最適な学習環境を作るためのICTの活用にも取り組み、成果をあげてきた。

これからの研究においても「音楽を知覚したり感受したりしながら音楽に対する感性を働かせる学習」は、これまで同様、重要な学習と捉える。そして、児童生徒が感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現したり味わったりする活動において、「そのよさや価値等を考えるなどして、創造的に表現したり鑑賞したりする力を育成」することができるよう、さらに研究を推進していく。

また、義務教育９年間の積み重ねを意識する中で身に付けた音楽の学力は、その後の人生において生きて働くものとなり、生涯において生活の中で豊かな関わりをもち続けていくことが重要である。これは「学びに向かう力、人間性等」に関わることであり授業において生活や社会における音や音楽の働きについて考え、音楽文化等について理解を深めることによって実現できるものであろう。

これまでの本研究会の成果を基に、児童生徒が豊かで多様な音楽と出会い、音楽的な見方・考え方を働かせて学習することによって、「知識及び技能」の習得、「思考力、判断力、表現力等」の育成、「学びに向かう力、人間性等」の涵養が図られ、生活や社会の音や音楽と豊かに関わる資質・能力が育成され、生涯にわたって生きて働くものへとつながることを目指し、研究主題を設定した。

また、本研究会には、音楽科の指導に苦手意識をもつ小学校教諭が指導法を得るために参加している。音楽の授業は難しい、というハードルを下げるべく、互いの学びや情報交換を大事に「いつでも・どこでも・だれでもできる音楽科の授業づくり」の視点をもって研究を進めた。

【研究の視点】

～いつでも・どこでも・だれでもできる音楽科の授業づくり～

① 知識・技能を活用し、一人一人に主体的な学びを促す活動の工夫

② 一人一人が明確な思いや意図をもち、伝え合う中で学びが広がる活動の工夫

③ 仲間と協働する喜びを感じながら音楽を表現したり味わったりする活動の工夫

Ⅱ 研究の内容

◎学習会

「いつでも　どこでも　だれでもできる　打楽器を使った授業アイディア」

講師：フラワービート代表・打楽器奏者　山本晶子先生

「身近な打楽器の指導法について」

講師：勝沼中　水上陽介先生・松里中　竹川佳那先生

◎研究授業　題材名「がっきとなかよくなろう」（小１・器楽）

授業者：加納岩小学校　　内藤　舞　先生

研究授業指導案

Ⅲ 成果と課題

県のテーマに沿った研究を進めると共に、東山独自の研究の視点「みんなができる」「だれでもできる」「いつでもどこでもできる」「みんなで知恵を出し、チームで学び合う授業研究」を合い言葉に学びあい、知見を深めることができた。

具体的には、表現分野における器楽指導に視点をあて、小中学校でよく使用される身近な打楽器の扱いや指導のテクニック、学習に必要な常時活動、児童の思いや意図を明確にするためのワークシートの作成、子どもの思いや意図を明確にするための発問や問い返しなどについて意見を出し合ってきた。

内藤教諭の授業では、研究会で討議されたアイディアがたくさん盛り込まれ、子どもたちが楽器に自由に触れながら伸び伸びと活動する中で、主体的に「楽器の音色」と向き合う様子が見られた。また日頃から行っている常時活動や、「友達にやさしく・楽器にやさしく」といった指導が垣間見え、学びの積み重ねが活かされた実践だった。

また学習会では、小中学校でよく使用される打楽器の扱いや音色、奏法等について学びを深めた。打楽器奏者・山本晶子先生のワークショップでは、指導者が「こう演奏すべき」という考えにとらわれず、子どもの自由な発想を活かして楽器に触れさせることが大事であり、器楽演奏を通して楽器にふれる楽しさを十分味わわせるという根本部分について確認された。また、水上教諭・竹川教諭を講師とした学習会では、バチの持ち方やチューニングなどの基本的な事項を再確認すると共に、全員で実際にアンサンブル演奏をしてみることで「みんなで合わせて演奏する楽しさ」を堪能でき、非常に有意義なものとなった。

来年度以降もこれら積み上げてきた研究を継続し、東山の音楽教育を更に発展させていきたい。

（部長　平井　祥子）

図工・美術科教育研究会

一人ひとりの力を引き出す題材と授業をどうつくっていくか
～発見と感動のある授業づくり～

Ⅰ　研究の内容

1　研究の柱

（1）子どもの課題や実態にあった題材と授業づくり

（ア）目の前の子どもの課題や実態をつかみ、ねらいを明確にして、より造形的な資質や能力が発揮できる題材の研究をすすめる。

（イ）様々な場面で、子ども一人ひとりに表現する喜びやよさを感じとらせ、見方感じ方を深めさせるとともに、子ども自身が主体となるような授業の組み立て方を工夫する。

（2）子どもの創造活動によりそう支援のあり方

（ア）子どもの思いによりそい、その実態に合った支援のあり方を考える。

（イ）子どもが何に悩み、考え、試行錯誤した末、どのような表現や鑑賞につながったのか、観察や対話、スケッチ、記録など、様々な方法でみとる研究をする。

（3）つながりと広がり、先を見通した実践の積み重ね

（ア）子どもどうしがかかわり合い話し合うなど、互いに学び合うことのできる場の設定を試みる。

（イ）題材と題材の関連や小・中連携、他教科との関連を図ったりすることで子どもや学校の実態に応じた、系統的・発展的なカリキュラムの工夫をする。

（ウ）子どもの生活を取り巻く地域や社会、それにかかわる人々とのつながりをもった美術教育を通して、自分自身や社会を見つめていけるようにする。

2　研究の内容

（ア）授業研究を実施し、感動と発見のある授業づくりについて考える。

（イ）学習会や実技研修を実施し、評価や授業づくりに生かす。

（ウ）研究会場を持ち回り、各校の展示環境などを参考にする。

3　研究の方法

（ア）授業案の提案、検討、実践、検証

（イ）一人一実践による作品研究

（ウ）学習会や実技研修など

Ⅱ　成果と課題

1　成果として

・「発見と感動のある授業づくり」というサブテーマを掲げ、3年目になった。この視点が定着し、子どもの姿を見つめた授業づくりが東山梨内で浸透してきたと感じている。

・県と同じテーマのもと、会員各自が実践し、研究を深めることができた。持ち寄って研究し合うことにより、そこから得たものを授業に生かせるようなよいサイクルができ、OJT 的な研修をすることができた。自分がもしその題材を扱うならどうするか、ということも考えながら実践を聞くことができた。

・実際の作品や教室環境を見ながら学ぶことができてよかった。小中で学び合うことで、子ども

たちの成長を見つめることができ、それぞれの発達段階での学びを意識することができた。
- 統一授業研にむけての教材研究や指導案検討、県教研に向けての研究、作品研究、学習会、実技研修など、さまざまな研究を行うことができた。
- 題材におけるねらいの明確化、協働的な学びの設定等について、研究授業をとおして研究を深めることができた。

2　課題として
- 毎年のことではあるが、研究会の人数をどのように増やすことができるかが課題である。この研究会での研究の成果を、研究会以外の先生方に伝える機会等があると、美術図工への興味をもつ人を増やすことができるかもしれない。
- ３年間とりくんできた「発見と感動のある授業づくり」をここからどのように発展させていくことができるか、皆で考えていきたい。
- 実技研修は大変有意義だったが、参加できなかった先生方もいたので、共有する時間があるとよいと感じた。

Ⅲ　統一授業研及び県教研の実践報告

1　統一授業研実践報告　小２「空きようきのへんしん」

〈A 表現(1)イ(2)イ B 鑑賞(1)ア共通事項(1)アイ〉

授業者：青木可奈子（奥野田小）

空き容器から自分の生活が楽しく、豊かになるものをつくる活動を通して、自らの生活をもとにして発想や構想をする力、思いに合わせて工夫する力、形や色などにかかわり、生活を豊かに創造しようとする態度を養うという工作の題材である。教材の研究や検討から様々な意見を交流して指導案を立てたことにより、子どもの姿を想定した研究を行うことができた。それにより、実際の子どもの活動や姿から検証し学ぶことができた。生活体験が少ない子どもが多くなっているが、学級の実態に合わせて、用途からのアプローチを選択した。題材の導入時に、用途としてだけ考えるのではなく、形にも注目させたところ、材料どうしを組み合わせる楽しさに気づき、子どもの思考が変わる様子が見られた。

2　県教研実践報告　　小４「ギコギコからワクワク～木でお家をもっと楽しく！～」

〈A 表現(1)イ(2)イ B 鑑賞(1)ア共通事項(1)アイ〉

授業者：市川安紀（塩山北小）

切った木材の形からイメージを広げ、形や色、それらの組み合わせによる感じなどを通して、家で使って生活をより楽しくするものをつくるという工作の題材である。のこぎりの扱いについてゲストティーチャーを招聘したことにより、技術的な面の支援のみならず、子どもたちが意欲をもって真剣にとりくむことができた。子どもたちは、ゲストティーチャーが実際に木を切る姿を見て、「自分もやってみたい」という思いをもち、どうやったら自分の思い通りに木を切ることができるか考えながら切っていた。そして、思い通りに切ることができたときには、「やった！」と、感動する姿が見られた。授業の中に子どもたちの「発見と感動」が詰まった授業であった。授業後の研究会でも、多くの意見交流があり、研究を深めることができた。

（部長　　菊島　美香）

技術科教育研究会

「つながり」を深め、資質・能力を育む技術・家庭科教育

～問題解決的な学習を取り入れた授業改善を通して～

Ⅰ　研究の内容

本研究会では、これまで東山梨の地域に根ざした教材の開発を主に、技術の学習内容と身近な生活を繋げるための研究を進めてきた。これまでの研究集会では、エネルギー変換の技術の「小電力発電」、生物育成の技術では「甲斐サーモンレッド」や「富士の介」について、また統合的な学習につながる「ドローンを使ったブドウ栽培」や「ワイン業者の６次産業の取り組み」などを紹介することができた。

今年度はこれまでの東山梨教育で培ってきた教材を「つながり」という言葉をキーワードとして研究を深めた。これまで授業に取り入れてきた技術と身近な生活の「つながり」だけでなく、単元の学習の流れを意識した教材同士の「つながり」、生徒の思考を促すためのワークシートなど補助教材との「つながり」、生徒が継続的に学習のサイクルが行えるような評価との「つながり」について研究を進めてきた。

また、より広く研究を進めるため、新たな分野への一歩として、情報の技術における「ネットワークを利用した双方向性のあるコンテンツのプログラミングによる問題の解決」では、生成 AI の技術を取り入れたコンテンツの制作について研究を進めた。

Ⅱ　具体的な研究内容

１　継続研究　地域教材の開発・改良について

「生物育成における題材計画の見直し」

今年度は２０２０年度から活用している地域教材「養殖魚のブランド化」について、あらたな視点である「ニーズとシーズ」を取り入れ、生物育成全体の課題解決学習に繋がるようなカリキュラムの検討を行った。

Ａ中学校では、水産生物で学習した内容を受け、畜産の学習ではブロイラーと甲州地どりを比較し、どちらを仕事にしたいかを考えさせる授業に取り組んだ。問題解決的な学習では、アンケートによるニーズ調査や、生成 AI を利用したシーズの検討を取り入れた課題設定の学習を行った。

また、Ｂ中学校では他県のブランド魚との比較を行い、それぞれの県の特徴やニーズ、シーズをもとに、甲斐サーモンレッドや富士の介に続く山梨県の第３のブランド魚を考えさせてみた。

（※Ｂ中　第３のブランド魚）

氏名	第３の山梨ブランド魚（仮説）	ネーミング	キャッチフレーズ
生徒１	富士五湖ならではの魚「ワカサギ」と、漁業の盛んな茨城県で多く取れる「マイワシ」の掛け合わせ。安定した生産性と、豊富なタンパク質、骨が柔らかく食べやすいのが魅力。	山茨（さんさぶき） 山（やま）＋ 茨（くさぶき）	ワイン大国茨・ 山梨共同制作！ 海と湖、奇跡の 結晶「山茨」

生徒2	富士山の清らかな水が流れ込む山梨県の清流域で育てる。この水は一年中ひんやりとしていて、ヤマメにとってとても住みやすい環境。エサも自然に近いものをあげていて、ストレスの少ない育て方をしている。ふつうのヤマメよりも体がキラキラと光っていて、まるで泳ぐ宝石できれいな水と丁寧な育て方が、富銀の美しさとおいしさの秘密。	富銀（ふぎん） 富士山と、美しい銀色の魚の輝き	山梨の清らかな水で育った銀色のヤマメ 山梨の水が生んだ銀の宝石！

2　情報の内容における教材開発について

「ネットワークを利用した双方向性のあるコンテンツのプログラミングによる問題の解決」

甲州市・山梨市はともにリーディング DX 事業に取組んでおり、特に甲州市では昨年度塩山中学校が、今年度は勝沼中学校が指定校として研究を進めている。

今年度の部会のキーワードである「つながり」を生物育成とは別の内容でも今後取り入れていくため、題材について検討し、A 中学校で研究授業を行った。

研究授業も含めたこれまでの学習の中では、生徒にとって身近なコミュニケーションツールであるチャット機能のプログラミングを通して、技術の学習内容と身近な生活を繋げる工夫をしている。

安全に使用するための方法を考え、パスワード機能や、NG ワードの検知機能を考えて追加するなどプログラムの改良を行った。その過程で、トラブルを未然に防ぐ仕組みを学んだり、そのような対策がなぜ必要となるのかといった道徳的な思考や判断力などについて触れたりするなど生徒の実生活に繋げることもできた。さらに、コンピュータとの双方向のやり取りを学習することで、計測・制御の学習や生成 AI の技術の学習に繋げていくことも考えている。

Ⅲ　成果と課題

数少ない研究の機会ではあるが、少しずつ研究を進めることができている。その中の成果として次のことがあげられる。

1　生物育成全体の学習の流れ(カリキュラム)を作成することができた。

2　これまで利用してきた地域教材を問題解決的な学習で活用した。ニーズとシーズの視点をもち技術の見方・考え方を働かせて考えさせる工夫をすることができた。

3　生物育成を軸に研究を進めてきたが、もう一つ、情報の分野に研究の幅を広げることができた。また今後の課題として、カリキュラムの有効性を更に検証していくことに加え、情報の技術の教材を増やしていくことをあげておきたい。

生成 AI を取り入れた授業も話題となっているが、生成 AI からアウトプットされる内容につての信頼性の問題、また AI をどの程度取り入れるかによる達成感の感じられ方については、これからの検討(研究)課題であると思われる。

（　部長　岡田　強　）

家庭科教育研究会

「つながり」を深め、資質・能力を育む技術・家庭科教育

Ⅰ.研究の内容

1.はじめに

現行の学習指導要領では、「住生活」において少子高齢化の進展や自然災害への対応がより一層求められ、幼児や高齢者の家庭内事故を防ぎ、自然災害に備えるための住空間の整え方を重点的に扱い、安全な住まい方の学習の充実を図ることをねらいとしている。また、学んだことを自分事として捉え、自分や家族のためにできることを考え、これからの生活を展望して、それらの課題を解決する力を養い、住生活に関する知識及び技能を生かし、住生活を工夫し創造しようとする実践的な態度を育成することが必要とされている。

本研究会では、令和2年度より継続して住生活について研究を進めてきた。昨年度までの授業実践の中で、生徒への住生活に関するアンケートをもとに生徒の実態把握を行ったところ、中学生にとって住まいは、日常生活の中で当たり前に整えられた空間であるため、自分から主体的に考えようとする生徒は少ない現状があることがわかった。

それらを踏まえて、実際の授業の中では、適切な課題の設定や指導の工夫を行ってきた。学習に向かう気持ちや興味・関心などを授業で高める手立て、自分も生活の主体者として中学生でもできることに気づかせ、実践する態度を養うことをねらいとして、研究を進めてきた。

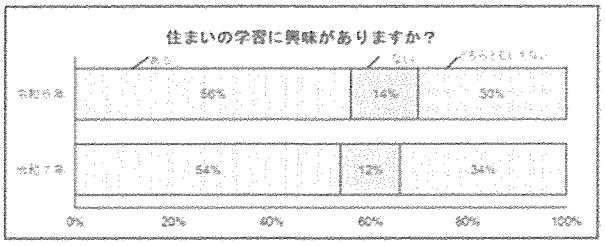
2.今年度の研究概要

（1）子どもの実態を受けた授業実践

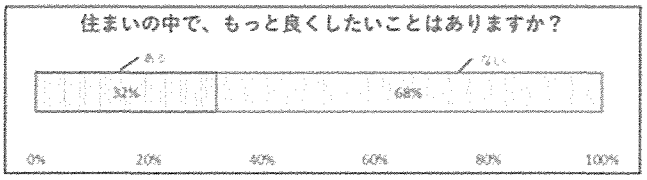
3.具体的な研究の内容

（1）生徒の実態把握のためのアンケート作成・結果の考察

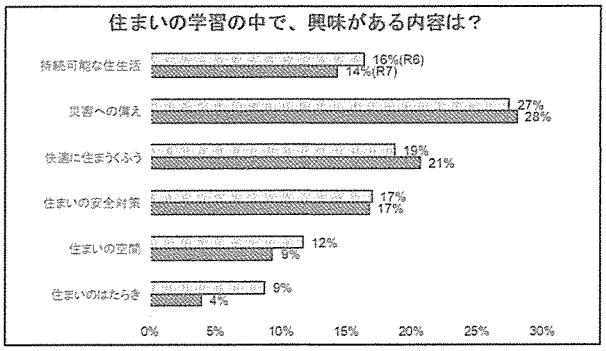
令和7年5月、塩山中学校1年生を対象にアンケートによる調査を行った。以下にアンケート結果の一部抜粋を載せる。



住まいの学習に関するアンケート



住まいの改善点に関するアンケート



住まいの学習で興味のある内容

住まいの学習に「興味がある」と回答した生徒は54%。「どちらともいえない」は、34%(R7年度)であった。多くの生徒が関心を持っているが、食生活や衣生活に比べて、自分事として捉えにくい生徒が一定数いることがわかった。「住まいの中でもっとよくしたいこと」についても、半数以上が「ない」と回答していることから、実際に困っていることや不安に思っていることに気づいていない様子がうかがえた。中学校で学ぶ内容を提示し、興味がある内容を聞いたところ「災害への備え」が 28%(R7 年度)と高い関心があることがわかり、生徒の興味に沿って生活の課題を見つけ、実践を行うことで、授業での学びを生活につなげることができると考えた。

(2)生徒の実態を踏まえた授業実践(塩山中学校 杉原藍衣美教諭)

家族の健康・快適・安全を考えた住空間の整え方を工夫しよう(1年生)という題材において、「家族の生活と住空間のかかわり」「住居の基本的な機能」の学習を踏まえ、自分や家族の住生活を振り返り、課題を設定する授業を行った。

生徒は、これまでの学習を振り返りながら、思考ツール(クラゲチャートやダイヤモンドランキング)を使って、自分の住生活における問題点を焦点化した。また、他者参照して、友達からヒントをもらいながら、さらに住生活の問題がないか視野を広げ、考えを深めていた。

この授業を通して、ICTを活用しながら協働的な学びにつなげ、自分の住生活の中の課題を設定することができた。その後の授業では、課題解決に向けた実践計画を立て、グループ交流を通して、さらに計画が具体的になるような実践計画を立てた。その後、各自実践を行い、この実践をこれからの生活にどのように生かすか考えることにつなげることができた。

Ⅱ.成果と課題

1.成果

(1)ICTを活用することにより、課題の焦点化をすることができ、実践発表もしやすかった。

(2)事後アンケートから、学習内容が自身の日常生活や家族の役割につながっている様子が見られた。また、「家族の安全を守る」「自分の生活を豊かにする」「将来を見据える」という3つの視点から、住まいの学習が自分の生活を見直すきっかけになったことがわかった。

2.課題

(1)実践内容とアンケートの結びつきが浅く、生徒の変容がみとりにくいところがあった。生徒の変容の予測を立てながら、研究の目的を明確にしてアンケートもアップデートしていく必要がある。

Ⅲ.成果物

・生徒の住生活における実態アンケート(事前・事後)

・生徒の実態を踏まえた授業案

(部長　小沢みどり)

教材の本質をふまえた体育指導のあり方

～体つくり運動（遊び）を通して～

【はじめに】

スポーツ庁が実施している「体力・運動能力調査」によると、子どもたちの体力については概ね低下傾向に歯止めがかかってきているものの、体力水準が高かった昭和 60 年頃と比較すると、基礎的運動能力は依然として低い状況にある。またコロナ禍を経て、休み時間・放課後の遊びや体育の授業以外に思い切り体を動かすことがない子どもも見られるようになっている。それにより子どもたちの体力低下や運動経験の乏しさが加速しているとも捉えられる。だからこそ、運動の楽しさや心地よさ、喜びを味わうことができる授業を展開していくことが重要であると考えた。

そこで、小学校体育科教育研究会として「体つくり運動遊び」「体つくり運動」を研究領域とし、子どもたちの基礎体力の向上や進んで運動に親しむ姿勢を育てたいと考えた。運動がもつ本質的な面白さを味わうことができる体育授業づくりについて研究をしてきた。

Ⅰ　研究の内容

1　研究の具体的内容

（1）「体つくり運動（遊び）」について理論研究と実技研修を行い、授業づくりを行う。

（2）ICT を用いたワークシートなど体育の授業の中での ICT の有効的な活用方法について研究を深めていく。

（3）各校での健康・体力つくり一校一実践の取組を共有し、日常的な取組や各校の体育的活動の様子の情報交換をする。

2　具体的な取り組み

（1）「体つくり運動（遊び）」実技講習会・理論研修会

「体つくり運動（遊び）」

講師　　岩田 純一先生（文京区立誠之小学校 指導教諭）

（2）6学年「体つくり運動でパワーアップ大作戦」（体つくり運動）授業研究

授業者　中込 将大教諭（八幡小学校）

指導助言　山梨県教育庁 保健体育課 指導主事 上野 裕城先生

3　授業研究

（1）本時の目標

○自己やグループの課題から選んだ動きの条件を変化させて、体力を高めることができる

（知識・技能等）

（2）ICT 端末利用の工夫

○事前アンケートの利用

○振り返りシートの使用

○動きを調べる

（ア）授業実践から学んだこと

・児童が互いに声をかけ合い、主体的に活動していた。

・子どもたちが工夫し、条件を変えて運動に取り組む様子が見られた。

・掲示物や前時の活動からヒントを得て、工夫している児童の姿が見られた。

（イ）授業実践から、今後さらに研究を深めたいこと

・高学年における体つくり運動は、「高める」という部分を大事にしなくてはならない。中学年の組み合わせから、「高める」というところの違いを明確にすること

・「どのような力を付けさせたいか」「子どもたちにどのようになってもらいたいか」を明確にして授業を展開すること

・児童が視覚的にわかりやすい教材を用意し、動きの高まりを感じられる ICT の工夫

Ⅱ 成果と課題

1 成果

・体つくり・体ほぐしの運動の研究を通して、体を動かすことの楽しさや心地よさを味わうことに気付かせる手立てや声掛け、仕掛けなど。中学年から高学年への系統性を踏まえた学びができた。

・実技講習会や授業案検討会などで、理論と実践を結びつけることができた。

・健康・体力つくり一校一実践の情報交流も、他校の体育的な活動を知る良い機会となった。

2 課題

・「動きを高める」視点につなげられる授業づくりや児童への声掛け、振り返りを活用した児童自身が自己の動きの高まりを感じられる ICT や掲示物を使った取り組み方

・高学年の体つくり運動における、体力を高めるための実践の継続研究

・他の領域の指導法の研究

Ⅲ 成果物

・デジタル化された振り返りシートやワークシート

・体つくり運動実践動画

（部長 鈴木 陸人）

中学保健体育科教育部会

生きる力を育てる保健体育学習を目指して

～基礎的・基本的な知識・技能の習得のための学習指導の在り方～

Ⅰ　研究の内容

1　研究のねらい

（1）基礎基本の定着を目指した学習形態の在り方

（2）主体的・対話的で深い学びが実現するための学習形態・場面の工夫

（3）課題解決に向けた、協働的な活動（ICT 端末を利用した学習シート、ICT 端末利用の工夫）

2　研究の概要

（1）研究授業　令和８年１月２８日（水）勝沼中学校グラウンド

球技　ネット型（ソフトテニス）　風間　唯　教諭

（2）理論研究にもとづいた授業実践について

①基礎基本の定着（段階的な教材・ルールの設定・男女や能力の差）

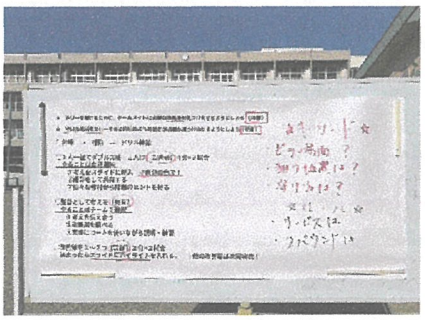
ラケット操作は感覚がつかみにくく、ラケットにボールを当てたり、ラリーを続けたりすることに難しさを感じる生徒が多い。従って、今回導入段階で『テニピン』を取り入れた。まずは手のひらにボールを当てることで、ボールに触れる回数を増やし、感覚をつかませた。それがラケット操作につながり、ラリーが続くことにつながったと考えられる。

②主体的で対話的で深い学び（つまずき教材提供・学習方法の自己選択）

自分たちで学びを深めるためには、基礎技能を高めるための知識も必要である。運動の特性やルールを理解し、キーワードを覚えたうえでアドバイスをする必要がある。手元や掲示資料で、誰でもアドバイスできるようなキーワードがあると発言しやすく、お互いに学びを深めて行けると考えらえる。

③協働的な活動（他者参照・スプレッドシートやスライドで協働編集）

昨今、幼少期に遊ぶ体験や運動経験が少ないまま中学進学してくる生徒も多くいる。楽しく運動を行った経験があると、学年が上がった時に経験をもとにさらに深めていこうという意識につながっていくと推察される。また、スプレッドシートやスライドを利用し他者参照をするなかで、様々な生徒の学びに触れることで、協働的な学習につながることが期待できる。


Ⅱ　成果と課題

（１）成果

基礎的・基本的な技能習得のためにはまず体育を「楽しい」と感じられるかどうかがポイントである。できた→楽しい→もっとうまくなりたいという生徒の好奇心を伸ばしていくために道具やルール、場の工夫を行ってきた。生徒と話し合いながらルールを決めたり、先生役を置いたりすることで、すべての生徒の学びを大切にする授業が展開できる。また良い発言をした生徒をピックアップすることで、他者参照になり次への学びにもつながる。以上の研究の集大成として研究授業で実践し、成果として表れた。

（２）課題

協働的な学びを仕組む上で、生徒は知識量が必要になる。端末上に様々な資料を用意し、生徒は参照しながらアドバイスをし改善策を見出すが、活動に入るとなかなかリンクしないことが見受けられる。また、上手な生徒へのアドバイスがなかなかしにくいため、どの生徒の言葉でも受け入れられる集団作りが必要である。さらに、目標を数値化すると、生徒はそれを達成するためにどう工夫したらよいか考えて実践すると考えられる。技能では良いプレーを真似したいという観点で考えさせても、学習意欲が高まっていくと見込まれる。

Ⅲ　成果物

①指導案

②ソフトテニス学習カード

③ソフトテニスチェックリスト

④ソフトテニスダブルス戦チームカード

指導案　　学習カード　　チェックリスト　　チームカード

（部長　三枝まり子）

保健教育研究会

自らの健康づくりに意欲的に取り組む子どもをどう育てるか
[甲州支会]心身ともに健康な生活を送る子どもをどう育てるか
～健康な生活習慣への取り組み～

現代ではSNSの普及により、健康に関するさまざまな情報が身近になり、容易に知識を獲得できるようになった。その一方で、近年の子どもたちが抱える健康課題は、就寝時刻の遅延や体力の低下、食生活の多様化、メンタルヘルスなど、複雑かつ多様化している。さらに、ポストコロナにおける社会活動の全面的な活発化や、AI・デジタルデバイスの高度な日常化といった社会状況の変化は、子どもたちの心身の成長や生活リズムに、多面的な影響を与えている。

そこで、心身ともに健康な子どもの育成と健康な生活習慣の確立を目指し、今年度も引き続き「生活習慣」と「心の健康」に焦点を当て研究を進めている。科学的根拠に基づいた内容で子どもたちが健康の大切さを実感できるような指導の工夫、また、よりよい健康生活を意識し自分事として考え、行動・習慣化できるような支援や指導、環境づくりをしていきたいと考え、取り組んでいる。

Ⅰ　研究内容と方法

1　生活習慣グループ：ＩＣＴ端末の使用と目の健康について
　　実態把握と保健教育の実践

2　心の健康グループ：身体活動の推進が児童生徒の心の健康に与える影響について
　　実態把握と保健教育の実践

Ⅱ　成果と課題

生活習慣グループでは、昨年度までの研究をもとに授業実践を行った。いかに自分自身の健康を主体的に捉え行動変容を実現できるかをねらいとし、自分に合った目標を立て友達に「行動宣言」として共有することで学びが深まった。また、取り組み期間を経て実生活に応用することで体への変化に気づき、さらなる行動継続につながった。来年度は教材のデジタル化と「外遊び」へ焦点を当て各校で授業を実施し、検証を図っていきたい。

心の健康グループでは、身体活動の推進が児童生徒の抑うつ傾向に与える影響を検討した。運動の効果に関する保健指導を行い、小学校では「運動ビンゴ」、中学校では「廊下でチャレンジ」という主体的な運動を促す取組を実践した。その結果、多くの児童生徒が運動によるリフレッシュ効果を実感し、特に積極的に取り組んだ層で抑うつ尺度の改善が見られた。一方で、評価方法や、運動が苦手な層へのアプローチ、実態把握の方法について課題も明確になった。来年度以降も、児童生徒の心の状態を把握していくとともに、抑うつ状態の改善に向けて、関係機関と連携を図りながら保健教育を進めていきたい。

Ⅲ　成果物

1　生活習慣　保健教育資料（指導案、配付資料等）、Google Formsでのメディアについての（事前・事後）アンケート、チャレンジカード

2　心の健康　保健教育資料（パワポ、配付資料等）、Google Formsでの心の健康観察

【山梨支会】心の健康への自己管理能力を身に付けるために
～ウェルビーイングを高めるための心の健康習慣づくり～

山梨支会では、令和４年度から子どもたちの心の健康状態に着目し、ポジティブ心理学を活用した保健教育を行っている。今年度は「ウェルビーイングを高めるための心の健康習慣づくり」をテーマに掲げ、研究をさらに深めた。

現代の子どもたちを取り巻く激しい環境の変化は、子どもたちの心の健康に大きな影響を及ぼしていることが考えられる。保健室から見える子どもたちの姿からは、心の健康状態が懸念される場面も多く、子どもたちに心の健康の保持増進のための自己管理能力を身に付けさせることは喫緊の課題だと考える。

そこで、本支会では心の諸問題を未然に防止する予防的援助として、心の健康を支える土台づくりに着目した。ポジティブ心理学的視点等を取り入れた心の健康教育を実践し、ウェルビーイングへ及ぼす影響を検証するとともに、児童生徒が心の状態について興味関心を持ち、より良好な心の健康状態で過ごせるような自己管理能力を身に付けるための効果的な健康教育の方法を探ることを目的に研究を進めた。

Ⅰ　研究内容の方法

1　八幡小学校の健康教育の実践に向けた指導案やおたよりの検討
2　八幡小学校における研究授業の実施
3　各校におけるポジティブ心理学的視点等を取り入れた健康教育の実践と実践内容の共有

Ⅱ　成果と課題

本研究が始まり４年目に当たる今年度は、八幡小学校での実践を中心に研究を進めた。指導案の検討やおたよりの共同作成、研究授業の実施等、取組を重ねる中で、児童生徒の良好な心の状態を育むための効果的な健康教育の方法を探ることができた。

各校においてもポジティブ心理学的視点等を取り入れた健康教育を実践し、それらの実践内容について組織内で共有を図った。各校で多様かつ充実した実践が行われており、それらを共有することで新たな視点を得るとともに、互いの実践を自分自身の財産として蓄積することができ、働き方改革にもつながった。

今後は、より家庭を巻き込んだ取組や、市内のどの学校でも取り組みやすい実践につなげていくことを課題とし、自らの健康課題を解決しながら、心身ともに健康的な生活を送ることができる子どもたちの育成を目指し、研究に取り組んでいきたい。

Ⅲ　成果物

・ポジティブ心理学的視点等を取り入れた指導教材

（部長　上治真央）

「子どもが生き生きと学ぶ生活科」
～主体的・対話的で深い学びを引き出すための手立てを通して～

生活科において、子どもたちが身近な人々、社会及び自然と関わり合う中で、価値ある経験をしていき、交流や関わりを深めていくことでより豊かな学びへと繋がっていく。友達や物と関わり、言葉や活動でやりとりをしたり、指導者との言葉のやりとりをしたりする中で体験による学びがより深まっていく。また、評価の視点や基準を明らかにしていくこと、そして見取ったことを生かして、その子どもなりの前進を見出していくことで、適切かつ子どもの気持ちの動く学習へと繋がっていく。

そこで、子どもたちが主体的に学び、物や人や自然との関わりの中でより深い学びをしていくための「具体的な手立て」「学びの深まる交流」「適切な評価のための評価カードや見取りの方法」、「学びを深めるための教師の関わり方」についての研究をすることで生き生きと学ぶことができるのではないかと考え、このテーマを設定した。

Ⅰ 研究の内容

1 研究の内容

・日々の授業について情報交換を行い、授業実践に生かしていく。

・創作活動を行い、共同で教材研究をし、授業に役立てる。

・授業研究を通して「子どもが生き生きと学ぶ生活科」について研究を深める。

2 研究の内容・方法

(1) 全会員の実践紹介と意見交流による学び合い

◇1学年　「もうすぐ２年生～新しい１年生をむかえよう～」　大島めぐみ(菱山小)

「きれいにさいてね わたしのはな」 小宮山美樹(日下部小)

「きれいにさいてね わたしのはな」 石場明日香(松里小)

「はじめのいっぽ」「かぞくにこにこだいさくせん」 柏原有衣(日下部小)

「きれいにさいてね わたしのはな」 武井克修(大藤小)

◇2学年　「まちが大すき たんけんたい」　山下史江(塩山南小)

「大きくそだて みんなのやさい」 神戸美優(八幡小)

「作って ためして」 向山有紀(八幡小)

「めざせ 生きものはかせ」 精進利恵(八幡小)

「えがおのひみつたんけんたい」 雨宮笑菜(塩山北小)

◇3学年総合「山梨市のパンフレットを作ろう」 中村真麻(日下部小)

◇3・4学年総合「玉宮に受けつがれてきたものを調べに行こう」 奥山美恵(玉宮小)

◇自立活動「ニセモノロボットをつくろう」 矢崎さつき(塩山南小)

「紙コップロケットをつくろう」 村松夏帆(塩山北小)

◇指導助言 古屋雅章校長先生(加納岩小)

（2）夏季学習会の設定

今回の学習会では、研究授業「作って ためして」に向けた実技研修を行った。実際に製作することで、児童が躓きやすいポイントや、改良の試行錯誤を促す手立てを具体化できた。また、新旧教科書の比較を通じて、本単元で重点を置くべき活動への理解も深まった。部員全員で知見を共有したことで、多角的な視点が得られる極めて有意義な学習会となった。

（3）研究授業

第2学年「作ってためして」　指導者 岡村理恵（山梨小）

本時は「試行錯誤を繰り返しておもちゃを改良し、力と動き、材料との関係に気づき、みんなで楽しく遊びたいと願いをもち、粘り強く遊びを作り出そうとしている。」を目標に、インクルーシブな視点による環境構成と主体的な学びを追究した。全員での指導案検討や実技研修を通じ、児童視点での教材研究や見取りの手立てを共有できたことは大きな成果である。また、生活科の体験が理科・社会の素地となる認識を深め、対話的な学びを支える学級経営の重要性を再確認した。先行実践や教材の工夫から具体的な指導法を習得できた本活動は、部内の共通認識を深化させる極めて有意義な機会となった。

Ⅱ 成果と課題

1 成果

○「一人一実践」による多様な事例の共有・・・全員が報告することで各校の工夫を幅広く共有でき、自学級で活用できる具体的なアイデアを得て授業力向上を実感した。

○研究テーマに沿った深い授業研究・・・共通テーマのもとで構想を練り、研究授業や情報交換を重ねたことで、実践に直結する専門性の高い学びへと深まった。

○主体性を引き出す環境構成と支援の具体化・・・統一授業研等を通じ、子どもが夢中になる姿から、それを支える環境構成や教師の適切な声かけ・手立てを具体的に学んだ。

○課題や「困り感」の共有による連帯感・・・成功事例だけでなく日々の悩みを共有し合えたことで、学校規模や実態に応じた改善策を考える有益なヒントが得られた。

○実践への即時性と意欲の向上・・・他校の実践から得た刺激を即座に日々の授業へ反映させるなど、研究会の学びが子どもの姿に直結する好循環が生まれた。

2 課題

●評価方法の具体化と研究・・・多忙な現場でも継続可能な評価のあり方を模索し、共通の視点を持てる「統一評価シート」の作成や効果的な見取りの手法について協議を深める。

●実態に応じた柔軟な研究交流の推進・・・学校規模や環境の違いを尊重しつつ、個々の学校の課題を研究会全体の学びに変える場作りを継続し、部員全員の実践力向上を目指す。

●ICT（チャット等）による情報共有の促進・・・チャット等を活用したタイムリーな意見交流を維持・発展させ、日々の細かな悩みや課題を迅速に解決できるネットワークを強化する。

（部長　矢崎さつき ）

自治的諸活動と生活指導研究会

一人ひとりを大切にした学級づくり

I　主題設定の理由

今の子供たちが成人して社会で活躍するころには、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予想が困難な時代となっている。子供たちを取り巻く環境の変化により学校が抱える課題も複雑化・困難化している。しかし、学校が抱える課題が複雑化・困難化しても、学校での「学び」の基本は、学級集団にあるといえる。一人ひとりの子供が集団の一員として互いに認められ、楽しく生活し、学ぶための空間が確保できるような学級集団づくりが求められる。そしてさらに、自分たちの思いによって自治的な活動を創り出し、そこから学び合える学習集団にまで高めていく必要があると考える。

そこで、本部会では、一人ひとりが認められる学級づくりをめざして、「一人ひとりの子供が居心地の良い集団づくり」、「人間関係の絆を強め、人とのつきあい方を学んでいく場面づくり」について研究を進めてきた。今年度は、新たに所属した部会員も増えたため、まずは「学級づくりの手立て」について学習し、集団づくり・人間関係づくりについて学びを深める。そして、中学校の先生も所属することになったので、小中連携や教科担任制における学級づくり等についても学習会・実践報告・交流会を行い、様々な視点から「一人ひとりを大切にした学級づくり」について研究を行う。その中でも、「子供自らがよりよい学級集団を築こうとする自主的・実践的な態度」を育てていくことが大切であるので、どのような手立てを行ったら子供たちが自主的に行動できるようになるのかも研究を深めていく。

II　研究の内容

1　研究の方法

（1）学級づくりのための手だての学習・演習に取り組み、学んだことを日々の実践に生かしていく。

（2）講師を招き「学級づくり・集団/人間関係づくり」についての学習会を行う。

（3）授業研究を通して「子供自らがよりよい学級集団を築こうとする自主的・実践的な態度を育てるための手だて」についての学習を深める。

2　研究の具体内容

（1）第１回研究会　　今年度の研究の方向性の検討・確認

（2）第２回研究会　　学習会①・年間計画についての確認

テーマ：「学級づくりのための手だて」

講　師：藤原　祐喜 教頭先生(山梨小学校)

（3）第３回研究会　　学習会②

テーマ：「一人ひとりを大切にした学級づくり」

講　師　：渡邊　克吉 先生(船津小学校)

（4）第４回研究会　　実践報告①

（5）第５回研究会　　実践報告②

（6）第６回研究会　　県秋季教育研究集会の還流報告　統一授業研究の指導案検討

（7）第７回研究会　　研究授業　第５学年学級活動

指導者：鈴木　太一　教諭(日下部小学校)

（8）第８回研究会　　研究のまとめ(本年度の成果と課題、次年度研究の方向性など)

Ⅲ　成果と課題

1　成果

○全４回の学習会や実践報告を通じて学んだSSTやグループエンカウンターの手法を、多くの教員が即座に授業に取り入れ実践し、その効果を感じることができた。

○多様な考えを認め合い、困っている友だちに自然と手を差し伸べる姿が見られるなど、児童生徒がお互いを大切にし合える「安心できる学級・学年づくり」が進んだ。

○他校の教員や小中それぞれの視点を交えた指導案検討を行うことで、一人では気づけない多様な意見が取り入れられ、研究テーマに沿った質の高い授業づくりができた。

○年度の早い段階で専門的な講義（藤原教頭先生による指導等）を受けたことが指針となり、根拠に基づいた効果的な学級経営や児童生徒指導へとつながった。

○学級担任だけでなく、専科教員の授業や中学校の現場においてもSSTやエンカウンターの手法が取り入れられ、研究組織全体として児童生徒に関わる研究体制が強化された。

2　課題

▲授業内での対話的な活動を単なる交流で終わらせず、思考力や表現力の育成、さらには学力の向上という本質的な成果にいかに結びつけていくかが今後の重要な課題である。

▲取り組みによって子供たちが具体的にどう変わったのか、その変容を客観的に捉え、エビデンス（根拠）に基づいて考察・蓄積していく手法の確立が求められる。

▲現在は小学校の実践が中心となっているため、中学校における特別活動や自治的活動、生徒指導の具体的な実践事例をより多く共有し、小中の連続性を深める必要がある。

▲特別活動以外の各教科の授業において、児童生徒同士が異なる意見を調整し、「合意形成」できるプロセスをいかに組み込むかも今後の検討事項である。（部長　橋本　耀太）

特別支援教育研究会

「自立をふまえて（どの子もともに生き、ともに育つ）」
～一人ひとりの実態をふまえた支援と指導のあり方～

Ⅰ　主題設定の理由

近年、特別な支援を必要とする児童生徒の数は増加の一途をたどっている。特別支援学級においても障害種別は多様で、それぞれの児童生徒の実態に応じた指導が求められている。また、通常学級においても支援や配慮を必要とする子どもが多く、支援学級・通級指導教室・通常学級の担任・担当が抱える課題は山積している。児童生徒、一人ひとりの障害の状況や発達段階、その特性に合わせた支援・指導を充実させることは、共通した研究課題である。

今年度の第７５次春季教育研究集会において、本県の研究テーマは「どの子もともに生き、ともに育つ」～多様性を認め、つながり、ともに学ぶインクルーシブ教育をめざして～に決定した。具体的な研究内容として、

◎各地区において、一人一実践等の主体的な研究とともに、授業研究や学習会等の組織的な研究を推し進める。

◎リポート作成において、子どもを中心とした実践により子どもたちの変容を見取り成果と課題を明らかにすることが確認された。

そこで本研究会では、授業実践・学習会・情報交換などを通して、これまでの研究の蓄積や成果を踏まえた継続的な研究を基にしつつ、児童生徒の一人ひとりの実態に合わせ、自立をめざした支援の方法を探るべく本主題を設定した。研究を進めるにあたっては、県のテーマである「つながり、ともに学ぶ」関わり合いを育てる活動も意識して取り組んでいく。

Ⅱ　研究の内容

１　講師を招いて学習会を行い、特別支援教育についての理解を深めた。

８月　８日　「特別支援学級の指導実践」

・学級経営
・児童生徒の実態をふまえた指導
・教材教具とその活用

講師　甲府市立国母小学校　　武井　恒先生

２　小グループに分かれ、一人ひとりの実態をふまえた支援のあり方、関わり合いを育てる活動について情報交換を行った。

９月１０日　　支援学級内・交流学級での子ども同士の関わり合いについて

１７日　　教員間・校内の連携、交流、関わりについて

3　研究テーマに基づいて、研究授業を行った。

９月１０日・１７日及び１月１４日
指導案検討　大藤小学校　　相澤　由佳教諭

１月２８日　　研究授業　　知的障害特別支援学級　自立活動
題材「自分の友達を紹介しよう」
授業者　　相澤　由佳教諭　　（大藤小）
指導・助言者　　岡　輝彦　校長先生（日下部小）

4　成果と課題について話し合い、次年度に向けて見通しをもった。

２月１８日　　今年度の成果と課題　来年度へ向けて

Ⅲ　成果と課題

1　成果

（１）研究授業について

・授業研究を通して、自立活動の指導のあり方を学ぶことができた。

・一人ひとりの実態を的確に把握し、伸ばしたい力や身につけさせたい力を明確にすることで、目標や手立て、支援・指導が明らかになることが確認された。

（２）学習会について

・講師から即実践につながる教材の紹介、有効な活用法、児童生徒の実態をふまえた指導法を教えていただき、参考になった。

（３）情報交換

・他校の実践や工夫を聞き、自分のクラスの支援を見直したり、生かしたりすることができた。日々の悩みを相談し合い情報共有できたことは、たいへん有意義だった。

（４）全体を通して

・児童生徒を取り巻く様々な「関わり合い」について、深く考えることができた。

・県や全国教研の還流報告により動向を知ることができ、参考になった。

・チャットを連絡や指導案検討等、情報共有の場として活用できた。

2　課題

・特別支援教育について、もっと学びを深めていきたい。

・研究授業はとても意義あるものであるが、授業者の過度な負担とならないように工夫していきたい。

・Chromebookをさらに有効的に活用していけるとよい。

（部長　　丸山　英子）

福祉教育研究会

学校教育における福祉教育のあり方を探る

Ⅰ　研究の内容

1　各校の福祉教育の実践や様々な実践例から学び合う。

2　福祉教育のあり方を探りながら、研究授業に向けて研究会員全員で授業づくりを行う。

3　理論研究などを通して、福祉について理解を深める。

Ⅱ　実践・研究授業

1　研究授業

第２学年　生活科　　塩山南小学校　　中村　咲

（1）　単元名　えがおのひみつ　たんけんたい（町たんけん）

（2）　ねらい

地域の多様な場所や人々に関わる活動や、身近な人々と伝え合う活動を通して、地域の人々と自分たちの生活との関わりや、公共物のよさや働きを捉えたり、相手のことを想像して伝えたいことや伝え方を選んだりすることができ、身近な人々と関わるよさや楽しさがわかり、地域に親しみや愛着をもち、すすんで交流することや、適切に接することができるようにする。

（3）　本単元の計画・指導案

小単元名　(全23時間)	学習活動	評価規準	評価方法・備考
どんながくしゅうをするのかな【1】①	・前回の町たんけんの記録や夏休み中の記録をみながらおすすめの場所を共有する。 ・いろんな人（大人・子ども・職業の違い・障害の有無）の定義を確認する。	知① 態①	ワークシート分析 発言分析
えがおのひみつ　たんけんたい(とびら)【1】②　本時	・「えがお」になる甲州市にはどんな場所があるのか振り返る。 ・行ってみたい場所を考え、目的「えがおのひみつ」を予想し、たんけんで知りたいこと、見てみたいことを考える。	思① 態②	ワークシート分析 発言分析 行動分析
もっと知りたいことを話そう③【2】	・行きたい場所をもとに、グループをつくり、約束や聞きたいこと、計画について話し合う。	態③	発言分析 ワークシート分析
えがおのひみつをさぐろう④⑤⑥⑦⑧⑨⑩【7】	・「えがお」の秘密を予想し、お店や事業所を探検したり、インタビューの練習をしたり気をつけることを確認する。 ・仕事を体験させてもらう時に気をつけることを話し合う。 ・町たんけんに出かける。仕事に挑戦させてもらったり、仕事の仕方や手順、種類などについてインタビューする。 ・町たんけんで気付いたことや考えたことを絵や文で表現する。	知② 思③ 思④ 態④	行動分析 ワークシート分析 発言分析
何をかんじたかな⑪【1】	・仕事の大変さや楽しさ、仕事をしている人たちの思いなどについて、自分の考えを伝え合う。	知③	ワークシート分析
	・働いている人のことをどのように思ったか話し合う。 ・気付いたり考えたりしたことをもとにして。これからの活動の見通しを立てる。		
体けんをつたえあおう⑫⑬⑭⑮【4】	・体験して分かったことをグループの友達と情報交換する。 ・他のグループの友達に伝えるための方法について話し合う・ ・絵本やクイズ、紙地図、新聞などの方法で、探検してわかったことや体験して感じたこと、考えたことなどを友達と協力してまとめる。	思⑤ 態⑤	行動分析 発言分析
えがおいっぱい　はっぴょう会⑯⑰【3】	・発表会の会場づくりをする。 ・探検して見つけたことや分かったことを協力して表現する。 ・他のグループの発表を見て、質問したり、感想を述べたりする。 ・発表会を振り返り、感想を記述する。	知④ 思⑥ 態⑥	行動分析 発言分析
まちの人にも　つたえよう⑱【2】	・各グループで、どのように表現するのか話し合う。 ・発表の準備や練習をし、発表方法の改善をする。 ・お世話になったまちの人に、町たんけんで分かったことを伝える。	知⑤ 知⑥ 思⑦ 態⑦	行動分析 発言分析
ありがとうを　つたえよう⑲⑳【2】	・町たんけんでお世話になった人にお礼を伝えることや、分かったことを身近な人たちに伝えることについて話し合う。 ・手紙や感謝状、ポスターなど、グループごとに方法を決めて表現する。	知⑦ 思⑧ 態⑧	行動分析 ワークシート分析 発言分析
何をかんじたかな㉑【1】	・仕事の大変さや楽しさ、仕事をしている人たちの思いなどについて話し合う。 ・働く人たちのえがおの秘密について予想と比べたり話し合ったりする。 ・大人になったらしてみたい仕事やなりたい職業について伝え合う。 ・じぶんのまちのすきなところの紹介をする。	知⑧ 思⑨ 態⑨	ワークシート分析 発言分析

指導案

（4）研究会より（話し合いの内容と助言についてのまとめ）

当事者意識の広がり

・体験の振り返りや工夫された導入が「ワクワク感」を醸成していた。

・身近な生活からスタートし、外の世界（他者）へ目を向けるスモールステップが効果的だった。

主体的な学びと協働

・端末と板書を使い分け、子どもたちが自分たちで助け合いながら話し合いを進めていた。

・「車椅子」という少し馴染みのないテーマでも、真剣に考える姿勢が見られた。

多角的な視点と心境の変化

・「自分が」から「相手が喜ぶ姿を見て」笑顔になるよう、他者理解が深まった

・働く人だけでなく、周囲の子どもたちも含めた生成 AI によるイラスト構成が多面的な理解を助けた。

確かな学級経営と指導力

・一学期からの連続性があり、学級経営がしっかりと安定していた。
・現場での臨機応変な対応（探検場所の確認など）に余裕と技があった。

2　各校の実践報告会

各校の福祉教育の実践報告から、互いに学び合い、自己の実践に生かした。

松里小　：児童会活動と福祉教育　各教科と福祉教育　他者理解についての取り組み
菱山小　：入学予定児との交流、町たんけんでの取り組み
奥野田小：学級づくりと福祉教育　特別支援教育と福祉教育
大藤小　：特別支援学級での福祉教育　生活科での福祉作業所見学
神金小　：小規模校ならではの児童会活動・道徳と福祉教育
祝小　　：児童会活動と福祉教育　各学年の福祉教育の取り組み
井尻小　：平和教育の取り組み　児童会での取り組み　道徳実践
塩山南小：児童会での取り組み　「思いやりフラワーブック」

このように、学級づくりをベースにしながら、各教科で幅広い実践が行えた。

3　講習会

今年度も、甲州市社会福祉協議会のサポートを受け講習会を実施した。今年度は「赤い羽根共同募金について」「甲州市社会福祉協議会でできること」をテーマに甲州市社会福祉協議会の東方さん・古屋さんに講義していただいた。本研究会では、近年、社会福祉協議会の方を招いての学習会は実施していなかったため、新たな発見とつながりを生み出せた学習会だった。



Ⅲ　成果と課題

1　成果

今年度の福祉教育研究会では、福祉を特定の教科に限定せず、学校教育のあらゆる場面と関連付けて展開した。最大の成果は、生活科や各教科、特別活動など様々な場面において、福祉教育との接続が可能であることを再確認できた点である。 研究授業や、実践報告から、「福祉の視点」を融合させることで、学びが深化し、共生社会を自分事として捉える契機となることを示した。

地域教材の発掘や社会福祉協議会との連携など、学校と社会をつなぐ実践も具体化し、福祉の心を育むための研究に取り組むことができた。

2　課題

研究を推進する中で、二つの課題が明確になった 。一つは、研究会構成の多様性の確保である。より多角的な視点で研究を深めるためには、東山梨地区全体での連携・参画が不可欠であるという意見が多く出された。義務教育を通じた福祉教育の系統性を探るための交流が次年度への課題である。 もう一つは、研究会員の実践をいかに学校組織全体へと広げていくかである。福祉教育は、特定の担当者が意識的に取り組むだけでは不十分であり、学校全体の教育課程の中にいかに自然に位置付けていくかを検討していきたい 。

3　成果物

・統一授業研の授業案
・実践報告学習会で報告された実践

（授業者　中村　咲）

食教育部会

食生活を考える
～子どもたちのより良い食習慣づくり～

Ⅰ　主題設定の理由

本研究会では、学校教育の様々な場面で食に関する指導の実践を広げ、子どもたちがより良い食習慣を身につけ、健やかに成長していくことを目指している。そのために、学級担任と栄養教職員によるティームティーチングでの授業の進め方、教材教具やICTの活用方法、給食時間における食に関する指導や指導資料を用いた実践の工夫などの研究を進めている。

授業実践や給食時間における食に関する指導を学校教育の一環として計画的に進めていくことは、子どもたちのより良い食習慣づくりにつながると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究内容

1　実践例：小中学校学級活動及び給食時間等

授業者：食教育部会に所属する部員

題　材：丈夫な骨や歯を作る秘密について考えよう

内　容：カルシウムは、日本人の食生活において摂取不足が指摘される栄養素の一つであるが、その役割は歯や骨の形成にとどまらず、止血作用、筋肉の円滑な収縮、精神の安定など、生命維持に不可欠な機能を担っている。特に骨量が急激に増加する小学生の時期における十分な摂取は、将来の健康を維持する上で極めて重要である。

そこで本実践では、児童生徒に対してカルシウムの持つ重要な働きや、効果的な摂取方法についての理解を深める授業を検討し、成長期にある自分たちにとってなぜカルシウムが必要なのかを認識させ、知識の習得にとどまらず、児童が自らの食生活を主体的に見直し、改善へとつながるような授業実践を行った。

2　夏季学習会

教材研究：東山梨地区の食育ティーチャーズノートに集録されているカルシウムの授業案を見直し、教材の検討及び作成を行った。

3　実践発表

内容：各学校での実践を報告し、情報共有を行った。

○実践発表Ⅰ　塩山南小（鈴木・志村）、日川小（萩原）、山梨小（深澤）

○実践発表Ⅱ　奥野田小学校、塩山中学校（宮島）、祝小（菱澤・五味）

Ⅲ　成果と課題

1　成果

（1）授業実践

・授業検討をする中で、牛乳や野菜の残食などの課題からテーマや内容を検討し、成長に必要なものを食べることへの意識改革が行えたことは、成果が大きかった。
・実践後は、学年だよりに授業の様子を掲載したことで、家庭でもカルシウムや成長に必要な食材について話題が上がり、そのことが食への関心を高めるきっかけとなっていた。
・全体で一つの授業案や教材を検討する中で、学級担任と栄養教諭双方の視点を効果的に取り入れることができた。授業案や教材を全て作り変えることなく大切に残すものと新しく取り入れるものを検討しながら、研究会が進められた。教材教具は、アナログの骨の模型を使用したり、ICTにおけるキャンバを使用したりすることで、授業力向上につながる有意義な取り組みであった。各校で、授業や給食時間を使って実践をすることで、食教育を広げることができた。

（2）夏季学習会（指導案及び教材検討）

・限られた時間の中で指導案や教材作成を進めることができ、土台のあるものを見直しながらよりよいものへと作ることができた。分担して活動できたことも効率的であった。

（3）実践発表

・作成した教材・教具が小学校から中学校まで一貫して活用できるものとなり、各校で多くの実践が行われ、その成果を報告・共有することで、個々の授業改善や新たな気づきも得られた。

2　課題

・今年度は、同じテーマで研究が進められ、多くの学年での実践を行うことができたが、低学年が多かったので、構成メンバーによって指導案も発達段階に合わせて作成していきたい。来年度においては、また新しいテーマでいろんな実践を進めながら学びを深めていきたい。
・栄養摂取の指導については、量やバランスについても改めて考える機会となり、よりよい指導の在り方を検討していく必要がある。
・偏食が多い児童生徒の意識を変えられるよう、継続的な声掛けや指導が大切である。
・ICTが日々進化していく中で、常にアンテナを高く持ちながら知識の更新を図っていきたい。
・部会の人数が少ないため、声をかけていくことが必要。実践の取り組みなどを自校に持ち帰り、伝えることを通して、学校全体で食教育に取り組んでいくことが大切である。

（部長　深澤智子）

研究テーマ「平和・人権教育と国際連帯の広がりをめざして」

Ⅰ　研究の内容

1　テーマに沿った各自の実践の積み重ね

2　実践の共有

3　授業づくり及び検証

Ⅱ　研究の方法

1　テーマに沿った各自の実践の積み重ね

日々の授業において、平和・人権を意識した実践を行う。行った実践を実践例として記録する。

2　実践の共有

各自が行った実践例を持ち寄り、実践報告会を行う。報告された実践について意見交換を行い、情報の共有を図る。

3　授業づくり及び検証

統一授業研究会に向けて、指導案検討を部員全員で行いながら、より良い授業に向けての手立てを考えるとともに、授業を参観する視点を共有する。授業後に研究会を行い、検証を行う。

Ⅲ　研究の経過

５月　７日	春季教研　研究組織　研究テーマ　研究内容
６月１１日	研究計画確認　研究授業授業者・一実践報告確認
８月　８日	学習会（指導案検討、臨地研修）
９月１０日	統一授業研（佐野教諭）
９月１７日	秋季教研、実践報告
１月１４日	県教研還流報告、実践報告
１月２８日	実践報告
２月１８日	冬季教研　研究の反省、実践報告

Ⅳ　成果と課題

1　成　果

・様々な実践を多くの先生方に発表していただき共に学ぶことができた。
・私たち教員も知り、学び続けることが大切であることも先生方の実践発表から学ぶことができた。
・「まずはやってみる」ことがとても大切だと改めて感じた。同時に点が線となるような継続性も大切だと気付かされた。
・メンバーが増えたことも研究の広がり、深まりにいい影響を与えた。
・夏の臨地研修では、「わだつみ平和文庫」を訪問し、今後の平和学習にどのように活用していくか考えるよいきっかけとなった。
・佐野教諭による研究授業は、多面的にとらえる見方や考え方を児童に与える素晴らしい実践だった。私たち大人の考え方を時代に合わせて柔軟にしていくことの大切さも部員一同実感した。

2　課　題

・わだつみ平和文庫を発達段階に応じてどのように活用していくか、ということを今後の課題として設定してもよいのかと思う。
・小学校の先生方が多いので、より中学校の先生方にも本部会に参加していただき、中学校の実践も共有することができるとさらに広がりをもてる。
・実践をすることで、そのテーマの奥深さに気づいた先生方もいたようである。「まずはやってみる」という段階から、専門性をさらに追及して研究していく段階に進むことも必要である。
・価値観が多様化している昨今、課題も増えてくる。それに対応するテーマの設定を考えていくことも重要。
・部会だけでなく、それぞれの勤務校で教育課程に組み込むなど、実践を確実に広げ、継続していくこともできるとなおよい。

Ⅴ　成果物

1　指導案

第５学年　「らしさ」について考えよう　　佐野　理恵（山梨小学校）

◇ねらい：性の在り方が多様であることに気づかせる
多様な性を持つ人へのかかわり方を考えさせる
自分らしさやその人らしさを大切にしようとする態度を育てる
◇資料：　動画『いろいろな性って何だろう』小学生高学年版　認定NPO法人 ReBit
神奈川県人権教育学習教材　小学校高学年用「らしさってなんだろう？」
小学校低学年用「自分が好きなもの」

2　実践報告資料

【小学校】

なにいろが好き？　奥山悠衣香（笛川小学校）
戦争と平和　天野ねいろ（井尻小学校）
みんなちがって、みんないい　～男の子・女の子じゃなくて　人として～　加々美教子（岩手小学校）
ジェニーちゃんのおもてなし　山宮彩子（加納岩小学校）
中学校の制服から考える「自分らしさ」　武藤有希（加納岩小学校）
男らしく、女らしくがいいの？　那須達憲　（松里小学校）
世界とつながる私たちの給食～『食べる』から始まるみんなの幸せ　益田芽央（加納岩小学校）
たずねびと　堀内友貴（後屋敷小学校）
語り部になろう　保坂千恵子（八幡小学校）

【中学校】

文学作品を日常生活の中で読むということ　尾身美廣（山梨北中学校）
当たり前を崩し多様性の理解と尊重につなげる実践　広瀬竜太　（笛川中学校）

（部長　三枝　洋介）

環境教育研究会

「自然との共生」をめざした「環境教育」のあり方
～身近な環境や自然に対して主体的にかかわる子どもの育成～

Ⅰ　研究テーマにかかわって

自然環境は全ての生き物の生活基盤であるが、人間はこれまで自然を破壊し、あたかも人間だけが特別な存在であるかのように自然に対して大きな負荷を与え、再生不可能ではないかと思われるような開発を行ってきた。その結果、地球は、大気汚染、海洋汚染、オゾン層の破壊、地球温暖化、酸性雨、水質汚濁、食糧問題、人口問題、エネルギー問題、絶滅が危惧される動植物の数々…。実に様々な環境問題を抱えるようになった。

これらの問題を解決するためには、私たちの生活と自然とのかかわりにどのような問題があるのかという実態を正しく把握し、その原因を追求することが大切である。また、環境問題を引き起こしている社会経済の仕組みも理解し、環境に配慮した仕組みに変革していく努力も大切である。私たち一人一人が、問題解決のために何をしなくてはならないかを考え、実行していくことが必要とされている。

本研究会では、まず、私たちが科学的な知識に裏付けられた環境に対する現状認識を深めるとともに、環境問題を自分の課題としてとらえ、主体的に取り組んでいけるような子どもの育成をめざしていきたい。そのためにも、子どもたちが自然に親しみ、自然の素晴らしさや不思議さに気付くことができるような環境学習の機会を重視して、環境に対する豊かな感受性を育んでいきたい。

Ⅱ　研究内容

1　授業研究

第４学年　　国語科　「我ら環境調査隊」（光村図書４年下『調べて話そう、生活調査隊』）

授業者　　小野　晃裕　教諭（八幡小）

本時の目標　アンケートを集計し、伝えたいことを考えることができる。

評価規準　　目的を意識して、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を比較したり分類したりして、伝え合うために必要な事柄を選んでいる。【思・判・表】

環境教育とのかかわり

・環境問題を自分の課題としてとらえ、主体的に取り組んでいけるように、身近な生活の疑問から出し合い、調べたいテーマを決める。

・自分たちの伝えたいことを考える場面では、自然と人間の関係性をより深く、複雑に捉え、「自然との共生」を目指すため、一方的な視点にとどまらない多様な見方を考える。

2　一人一実践

・会員一人一人が環境教育に関わる実践を報告し、意見交換をする。

3　学習会

講師：植原　彰　先生

場所：万力公園

内容：万力公園の自然を授業に生かす活動例を学ぶ

Ⅲ　成果と課題

1　授業研究

２月の統一授業研は、第４学年国語の授業を実施した。本授業は「自然との共生」という研究テーマのもと、児童が主体的に環境問題へ関わることを目指して構成された。地域や自然に関するアンケート結果を分析し、自分たちの生活にある疑問を出し合い、調べたいテーマを自分事として設定した。思考を深められるよう、教師が「結果から何が言えるか」「自分の予想とどう違うか」を問いかけた。グループ交流では、一人一台端末に入力した自分の考えを基に、仲間の多様な意見に触れて視点を広げ、自分の生活と身近な自然との関わりや環境保全・環境問題につながることについて、進んで友達と伝え合おうとする児童の姿が見られた。また、端末を活用してアンケートの実施から集計・分析を行い、それをもとに自分の考えをまとめ、グループ内で意見交換したことはとても効果的だった。授業者が国語の学習に環境教育の視点を取り入れることに挑戦した本教材は、本研究会の財産となった。研究会においても、授業が子どもたちの心に残る素晴らしいものであったと感じ取ることができた。

2　一人一実践

本年度は、生活科や社会科、図画工作科、総合的な学習、特別支援学級での自立活動、中学校での出前講座などの様々な実践が報告された。工夫を凝らして身近な環境や自然に対してのアプローチを試みたことは意義が大きかった。環境教育にも様々な切り口があることを会員相互に理解し、視野を広げることができた。その中で、環境教育は長期的で継続的に行われる必要があることから、次年度につながる系統的な視点をもって指導を行っていくことが効果的であることがわかった。また、SDGsの考え方やICTの活用などを重視した実践がいくつも挙げられ、系統性を意識したSDGsの取り組みやICTを効果的に活用する方法、実体験の大切さについて、会員同士で共有することができた。

本研究会が環境教育へのより深い理解や知識を学ぶ場となるよう、今後も研究を進めていきたい。

3　学習会

本年度は、９月に万力公園において、講師に植原彰先生をお迎えし、「万力公園の自然を授業に生かす活動例を学ぶ」学習を行った。落ちている葉の観察の仕方、木の幹の太さを比べることなど、児童を何度も引率して学習の場としてきた万力公園であったが、新しく知ることばかりで驚きの連続だった。日頃、何となく眺めているだけでは気づかない自然の魅力や、自然とのふれあいや楽しみ方を再認識することができ、今後の実践に生かしていきたいと強く思った。

（部長　松岡めぐみ）

情報活用能力の育成

Ⅰ 研究の内容

1　研究主題に関わって

社会の情報化が急速に進み、今や情報機器は生活に溶け込んでいる。今後も情報化社会をめぐる状況はめまぐるしく変化していくことが予想される。このような社会を生きていかなければならない子どもたちは、「情報活用能力」を身につけ、情報社会に対応できる力を得ていくことが求められている。

近年、学習指導においては、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が図られることが求められている。これらの学びを進めていくためには、学習指導要領で言語能力、問題発見・解決能力と並ぶ「学習の基盤となる資質・能力」の一つと位置付けられた「情報活用能力」の育成が欠かせない。

「情報活用能力」の中でも「B. 思考力、判断力、表現力等」の「問題の解決・探究における情報を活用する力」は、単に情報を集めるだけでなく、その情報を効果的に分析・活用し、問題解決や探究を進める力を指す。これは、日常生活や仕事、さらには学問の探究においても非常に重要であり、情報化社会を生き抜くために欠かせない能力である。そこで本部会では、研究授業において「問題の解決・探究における情報を活用する力」の育成を目指し、研究を進めていく。

また、学習会の中で各学校でのICTを効果的に活用した取り組みやプログラミング的思考の育成を意図した取り組みなどを交流し合うことで、教師の指導力の向上を図っていく。さらに、デジタルシティズンシップやメディアリテラシー等、情報モラルに関わる研究も進めていきたい。昨年度までの研究の成果と課題をいかし、今年度の研究を深めていく。

効果的なICTの活用例

- スプレッドシートの活用。各教科でのふりかえりシート。ルーブリックを作成し、児童に評価基準を示す。
- Google for Education、FigJam、Canvaなどを利用した考えの構築や交流。授業や生活の中で児童が活用し、自他の考えを瞬時に共有することに慣れ、議論やまとめ学習などに時間を取ることができる。

2　研究の具体的内容

（１）授業研究　　（２月３日）

小学校　第６学年　社会科「日本とつながりの深い国々」

（２）ICT端末を活用した指導の工夫

・スプレッドシートを活用し、単元の学習シートを作成した。単元や本時の見通し、ルーブリックなどを提示することで、児童の活動が明確になるようにした。
・探究のサイクルの「情報の収集」「整理・分析」において、自分の考えを構造化し、交流によって考えを深めるために、FigJamを活用した。FigJam上の付箋同士を関連付け、情報のつながりを可視化できるようにした。

（3）検証方法
ア　児童のまとめ、振り返り
イ　教師の見取り（児童の活動や話し合いの様子、発言）
ウ　授業の検証・分析（児童が学習課題に取り組む様子の録画動画の分析）

Ⅱ　成果と課題

1　成果

・研究授業を中心に研究会として成果があった。「課題設定→情報収集→整理・分析→まとめ」のサイクルが意識され、特に事実から背景や要因へと教師が思考をシフトさせた点が、探究を深める上で効果的であった。
・学習会では、各校の ICT 活用や情報活用能力育成の具体的な授業実践が共有され、工夫や留意点を学ぶことができた。端末操作にとどまらず、Google や FigJam、Canva 等のツールを活かした思考の深まりや探究のサイクルの授業展開が示され、参加者は授業改善につながる具体的な視点を得ることができた。
・外部講師を迎えた学習会では、情報モラルについて単に禁止するのではなく、子ども自身が考え判断する力を育てる指導の重要性が確認された。情報活用能力は技術的な技能だけでなく、倫理的判断力や社会的態度と結び付けて育成する必要があるという理解が深まった。

2　課題

・ICT を活用した授業においても、個々の気づきを結び付けて全体を捉える指導や、比較の視点をより明確に提示することで、児童の自走と探究の質の向上が期待される。
・生成 AI の急速な進展に対応する必要性が確認された。今年度の研究成果に満足せず、生成 AI も意識した新たな実践や研究の継続が求められる。技術の変化が速く現場に負担がかかる中でも積極的に学び続ける姿勢が重要である。
・「情報活用能力」と「探究スキル」の混同や共通理解の不足が指摘され、概念の整理と頭合わせの必要性が示された。探究サイクルについてもより深く検討する機会が求められ、用語や理論の明確化が今後の研究の基盤となる。

Ⅲ 研究の成果物

・第6学年 社会科 学習指導案「日本とつながりの深い国々」
・ICT端末の教科・校務における効果的な活用方法の実践例

（部長　山内　要保）

進路教育研究会

一人ひとりにあった生きる力をつけるための進路指導・キャリア教育はどうあるべきか
～小・中学校の実践を通して～

Ⅰ　研究の方法

・各教科の授業をキャリア教育の視点で実践し、情報交換をする中で相互的に学習する。
・地域との連携、また職場体験について各自独自の実践を学び合う。
・進路教育・キャリア教育について各校の実践を持ち寄り学びあう。

Ⅱ　研究の具体的内容

実践授業案

1　授業実践

東雲小学校　第６学年　国語科　（岡村　澄人　教諭）

「おすすめパンフレットを作ろう」

【単元の目標】

・引用や写真を用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。
・言葉には、相手とのつながりをつくる働きがあることに気づくことができる。
・文章の構成や展開、文章の種類とその特徴について理解することができる。

【キャリア教育の視点】

・友達、保護者、または地域の方の話を聞いて、パンフレットの構成に生かそうとしている。
・クラスの中で自分の考えや思いを正確に伝えることができる。

〔人間関係形成・社会形成能力〕

・調べたこと、聞いたことを整理し、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。

〔自己理解・自己管理能力〕

・書き表したいことをスライドにまとめようとしている。〔課題対応能力〕
・学習活動の中で自分自身にとって必要な情報を集め、適切に判断し、活用している。

〔キャリアプランニング能力〕

2　実践・資料発表（発表順）

奥野田小	キャリア教育の全体計画の作成例・各学年での実践紹介
塩山中	校内学習支援センター「ほっとルーム」におけるキャリア発達支援の実態 学校の教育活動全体を通したキャリア教育について 総合的な学習の時間における「甲州市自慢（地域学習）」のとりくみについて
勝沼中	農業体験および職業体験を核としたキャリア教育
山梨南中	夢をもち、将来や生き方について考える学びについて（総合的な学習の時間）
山梨北中	職場体験学習の具体的な実践例 ＰＡＳカードを活用した進路学習の具体的な実践例
後屋敷小	国語科「もしものときにそなえよう」キャリア教育の視点での授業実践
松里中	ころ柿体験学習等を核としたキャリア教育の具体的な実践事例

Ⅲ　成果と課題

成果

本年度の研究会では、小中学校の枠を超えた多様な実践交流を通じ、キャリア教育の本質について知見を深めることができた。

各校の実践からは、「自己選択・自己決定」を促す工夫やICT・生成AIの活用、さらには教育課程への体系的な位置付けが示され、他校の事例を自校の指導へ還元する重要性を再確認した。特に、学びを社会と接続させる試みは、未来の担い手である子どもたちに必須の視点である。また、小中相互の授業参観や指導助言により、発達段階に応じた進路保障のあり方が明確になった。「進路保障は学力保障である」との認識のもと、全教育活動を通じたキャリア形成の支援に、教師としての責務を果たしていきたい。

課題

本年度の研究体制（研究授業１本と各員の実践報告）は、単元を通した系統的なアプローチを学ぶ上で適切であると概ね支持された。チャット等を活用したデジタルでの情報共有は、校務による欠席者への保障として極めて有効であり、次年度も継続を望む声が多い。

今後の課題として、小中連携をより深めるための小学校教員の増員や、異動等に伴う会員の確保が挙げられた。また、研究内容のさらなる充実に向けて、総合的な学習の時間だけでなく各教科におけるキャリア教育の授業実践や、外部講師による出前授業の活用、デジタルと紙媒体の併用検討など、より多角的な視点での実践研究の展開が期待される。

理論研究に基づいた実践について

本年度の研究会は、小中の教員が協働して指導案検討や授業研究に取り組むことで、キャリア教育の視点を深く共有できた。

実際の子どもたちの姿を通した協議は、具体的な指導法や支援、声かけのあり方を再考する貴重な機会となった。特に、発達段階に応じた系統性が重視されるキャリア教育において、小中が連携して議論できる場の有用性が高く評価されている。また、丁寧な運営体制や、チャット等を活用した指導助言資料の共有も継続が望まれている。今後は、教科指導を通じたキャリア教育のアプローチをさらに発信し、より幅広い層の参加を促すことで、研究会の強みである校種間連携を一層確かなものにできるであろう。

Ⅳ　成果物

❶ 小学校第６学年 国語科におけるキャリア教育実践レポート

❷ 各校におけるキャリア教育および進路教育実践レポート

❸ 指導助言者によるキャリア教育の基礎的理解及び学力保障に関する各種資料

（推進責任者　　雨宮　正　）

保護者・地域住民との提携研究会

地域とともにある学校づくりをめざして

Ⅰ　研究の内容

1　研究の方法

（１）研究の柱

・学校と保護者、地域との関わり方・提携の方策について

・学校・子どもたちが地域の人々や保護者とのつながりを生み出す実践

・研究成果の共有（情報発信も視野に入れる。）

（２）部員は各校の実践を通して、子どもたちの変容、問題点、悩みなどを提案しそれについて討議し研究を深める。

常任講師の先生方に、常時ご指導・ご助言をいただく。

（３）保護者・地域との提携について、授業実践を通し研究を深める。

2　実践発表と授業実践の紹介

〔実践発表…各校での保護者・地域住民と提携した教育活動や行事の実践〕

（１）大和小学校

・保護者・地域と連携した取り組み：　地域を知る→自慢→役立ちたい

大和ウォーキング大会　名所案内説明　昔話紙芝居（地域の回覧板を利用）

大和の未来を考えよう~旧大和中学校を通して～

風林火山　～５３０大作戦～　自然を守る活動

（２）塩山北小学校

・保護者、地域との連携：ふるさと学習　6年かけて地域の魅力にふれる

（３）山梨北中学校

・保護者と地域住民との連携：学校運営協議会（CS）　職業講話（農業）

（４）山梨小学校

・保護者・地域との連携：

ECHOES 学習（農業体験）バリアフリー教室（国土交通省）　聾学校との交流

（５）笛川小学校

・保護者・地域との連携：米作り体験　PBL で地域と繋がる

本楽隊（保護者を中心とした読み聞かせボランティア）

（６）日川小学校

・保護者・地域と連携した取組：　日果輪クラブ　川倉（堤防）

（７）塩山南小学校

・保護者・地域と連携した取組：

・町探検への保護者の協力　PTA 早朝作業　家族であいさつ運動

（８）勝沼小学校

・保護者・地域住民との連携：虫探し　昔遊び集会　地区探検　読み聞かせ

ブドウ絞り・摘粒作業体験　ミシンボランティア　着物教室　落ち葉はき

〔夏季学習会〕

○学芸員の専門的かつ丁寧な解説により、山梨の考古学的価値を深く学ぶことができた。山梨県は、縄文時代の文化財が多くあり、土器は入れ物としての用途だけでなく情報伝達機能もあったと学んだ。また、峡東地域にも貴重な資料が残されており、地域学習における具体的な教材発掘に繋がる研修となった。

〔授業研究〕

小４学級活動（日下部小学校　米倉　佑季先生）

議題：「米作りをしよう~脱穀後の稲わらのゆくえをさぐろう~」

授業の概要：バケツ稲での米作りの体験を基に、脱穀後の稲わらの活用を主体的、協働的に考える素晴らしい授業実践であった。昔の暮らしの知恵や工夫、ＳＤＧｓの学習など様々な視点で深められる題材であった。

Ⅱ　成果と課題

1　成果として

○実践発表を行うことで、各学校が地域環境や学校規模、特色を活かして提携活動を行っていることを知ることができた。具体的な行事や、授業における人材活用の事例を共有することで、自校の教育活動の参考となった。

○小学校だけでなく中学校の実践にも触れることで、義務教育９年間を見据えた地域連携が共有できる。小学校での豊かな体験を中学校へどう繋いでいくかという小中連携の視点を大切に互いの実態を知る情報交換の場として、今後も継続していきたい。

2　課題として

○授業で地域との関りや人材活用を進めていくためには、題材選びや授業案検討を部会全体で早めに行うなど、組織として授業実践を支えていきたい。

○来年度以降も本研究の柱である地域とともにのテーマを継続し、変化する社会に合わせた提携の在り方を模索していきたい。また、小中連携を深めるために中学校の先生方の参画をはかりたい。また、授業実践における日程調整の工夫も行っていきたい。

Ⅲ　成果物

○各校の実践レポート

○小５　総合的な学習の時間　指導案

○小４　学級活動授業実践の県教研レポート

（部長　金子　佐由美）

教育条件整備研究会

「豊かな教育を子どもたちに」

Ⅰ　研究の内容

1　研究内容の具体的内容と方法

（1）甲州支会と山梨支会に分かれ、それぞれの課題について研究をすすめた。

ア　甲州支会…「豊かな教育を子どもたちに～私たちの意識改革～」

○予算分析・不用額調査
○教育環境実態調査
○中学校統合完了後のとりくみ
○文書マニュアル改訂

イ　山梨支会…「豊かな教育を子どもたちに」

○保護者負担軽減と学校予算…予算分析、教材費・私費・燃料費調査
○働き方改革と業務改善…ＩＣＴ利活用・働き方改革調査、オルフィス使用状況調査
○子どもが主体的・意欲的に学べる学校づくり…義務教育学校開校にむけたとりくみ
○事務職員の職務のあり方と学習権保障…特別支援教育学習会

（2）『東山梨教育研究６４号』内の「教育行財政及び教育環境の実態」を担当し、調査を実施。調査前には留意事項を全体で確認し継続調査を実施した。教育環境の実態把握と改善点を探り、調査の活用を考える。

Ⅱ　成果と課題

1　成　果

（1）甲州支会

今年度は３年サイクルの２年目の年であり、昨年度から取り組んでいる中学校統合にかかわる事務支援や予算分析を継続しておこなった。統合にかかわる事務支援については、共同学校事務室とも連携しながら、備品の移管作業や消耗品の分配を行ったことにより今年度をもって完了させることができた。予算分析においては、各学校で作成した予算差引簿を共有することにより、市内小中学校全体の予算の現状を確認し、課題となる点を把握することができた。成果や課題点の共有によって一人一人の意識改革につながり、研究を深めることができた。

（2）山梨支会

春季教研で決定した４つの研究の柱に沿って研究をすすめた。予算の分析や私費負担調査を継続して実施し、保護者負担軽減にむけて予算の精査をおこなった。また、教育現場の課題となっている働き方改革について、ＩＣＴの利活用状況や印刷状況をもとに現状を分析した。さらに、山梨県内初の義務教育学校の開校にむけたとりくみを開始したほか、特別支援教育・インクルーシブ教育システムについての学習会も実施し、子どもたちの学びの場の保障について知見を蓄積することができた。

（3）全体として

分散会形式で支会ごと研究をおこない、各市における課題を明確にし、それぞれ継続している研究をさらに深めることができた。両市ともに予算に関わる継続的な研究等に

おいて共同学校事務室との連携も機能していた。採用年数や年齢に関わらず、全研究会員の共通理解のもと、事務職員の専門性を高めあうことができた。教育環境実態調査については、調査前に留意事項を全体で確認し、継続調査を実施した。両市の教育環境の実態把握と課題を明らかにすることができ、研究を深めることができた。

2　課　題

（1）甲州支会

予算分析については今後も研究を重ね、予算の有効活用及び実績に伴う予算要求へとつなげていきたい。その実現に向け、これまで行ってきた全体での意見交換に、市の予算方針や学校規模別の課題等の視点を加え、より多角的に予算分析を行えるよう取り組んでいきたい。また、明らかとなった課題を共同学校事務室と連携しながら、予算要求に向けて教育委員会へ要望していく必要がある。次年度以降においても、予算分析に取り組み、共同学校事務室と連携して課題解決と意識向上に向け研究を行っていきたい。

（2）山梨支会

今後も予算の分析にとりくみ、教育資源の有効的な分配へとつなげていきたい。そして、調査資料の活用や要求実現にむけたアプローチについても検討を重ね、さらなる教育環境の整備を図ることが求められる。また、来年度から校務支援システムが刷新されるが、システムの効果的な運用を検討し、働き方改革を推進する契機としたい。今後も山梨市の教育活動や課題に即した研究をおこない、子どもたちの豊かな学びの実現に寄与していく。そのため、共同学校事務室や市教委との連携を一層強化していく必要がある。

（3）全体として

両支会とも、予算分析の継続的な研究と共同学校事務室との連携強化をすすめ、学校課題の解決を目指したい。市の予算方針や学校規模等の視点を加えた多角的な分析と次期校務支援システム運用による働き方改革の推進を重点課題としたい。さらに分析結果を根拠とした実効性のある予算要求や教育資源の有効配分へとつなげ、より良い教育環境の整備と子どもたちの豊かな学びの実現に向けて、持続可能な研究をすすめていきたい。

Ⅲ　成果物

1　甲州支会

○予算分析表

○塩山北中学校移管備品一覧

2　山梨支会

○学校配当予算分析表、学校配当予算一覧表、学校配当予算・決算一覧表

○義務教育学校開校にむけた現状課題分析

○燃料費市教委一括処理にむけた燃料費実績調査表

○印刷用紙年間使用枚数集計表（ＩＣＴ利活用・働き方改革現状分析）

（部長　　大島達也）

豊かな学びを創造するゆとりある教育課程の編成と実践

Ⅰ　研究の内容

1　研究の方向性

新学習指導要領が全面実施され、子どもたちの学力向上に対する期待が高まっている。私たちは、「何を学ぶか」ではなく、「どのように学ぶか」を改めて問い直し、自主創造的な教育実践を積み重ねていかなければならない。子どもたちに「ゆたかな学び」を保障していくために、質の高いカリキュラムや実践を創造していくことは、私たち教職員の使命である。子どもの実態をふまえ、教材の活用や授業の展開を徹底的に検討することに加え、カリキュラムや授業プランを工夫して、その内容や方法を創り変えていく必要がある。すべての子供たちに、学び合いの中で「学びの意欲」を喚起させる「わかる授業」「楽しい授業」を創造するために、日々、目の前にいる子どもたちの実状に合わせたカリキュラムを追究し続けていかなければならない。

本研究会ではこれまでに、主にカリキュラム編成の工夫について総合的な学習の時間を中心に研究を進めてきた。研究会員全員がそれぞれの実践を持ち寄って意見交換を行い、指導の工夫や可能性について討議を重ねてきた。学習指導要領においては、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」と「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成」によって学力向上を図ることが示されているが、時間数が削減された総合的な学習の時間においては、各教科で学んだ知識や能力を生かすことによってその成果を高めることが期待されている。そこで本研究会においては、総合的な学習の時間だけにこだわらず、他教科での実践も視野に入れ、自主編成によるカリキュラムの工夫について研究を進め、検証結果を日常実践に還元していくことを目指している。

授業実践においては、多角的な視点をもって教材や単元を分析しながら「どのように教えたらよいか。」「どういう授業を展開したら効果的か。」を模索していくことを基本とし、定められた指導計画によるものではなく、自主創造的学習プランを策定して実践を進めていく。

そのために、次の3つの視点を重視して、成果の検証にあたる。

（1）授業(単元)における、「子どもにつけさせたい力」は何かを明らかにする。

（2）授業(単元)において、授業者が「自主編成した部分はどこか。」「工夫したところや作りなおした点はどこか。」を明らかにする。

（3）授業(単元)のふり返りや分析を丁寧に行い、成果と課題を明らかにする。

授業の分析においては、授業の様子を撮影した画像・映像の効果的な活用と、子どもの記述などを、多角的に分析していくことによって、子どもの変容をみとり、成果と課題を明らかにしたい。本部会としては、すべての子どもたちの「学びたい」という意欲を引き出す工夫と、すべての子どもに「豊かな学び」を保障していくことによって、結果として子どもの学力の向上にもつながるように、内容や方法を捉え直す努力を積み重ねていきたい。

2　研究授業と各教科などにおける個人実践発表

○理科「風やゴムのはたらき」　祝小：小宮山公仁　教諭

○理科「こん虫のかんさつ」　加納岩小：神宮寺香織　教諭

○数学科「正負の数」　山梨南中：前田　大輔　教諭

○外国語科　5年「世界の友達１・２・３」　6年「Unit6 I want to go to Italy.」
日下部小：古屋　友香　教諭

○音楽科「はくのまとまりをかんじとろう」　日下部小：岩下亜希子　教諭

○社会科「自然条件と人々のくらし」　八幡小：山田　勝博　教諭

○総合的な学習の時間「聴覚障害について知ろう」　日下部小：鶴田真紀子　教諭

研究授業

○総合的な学習の時間「お米人気回復プロジェクト～お米の良さをみんなに伝えよう～」
笛川小：向山　澄　教諭

※指導助言　後屋敷小：竹川　俊之　校長
勝沼中：田辺　秀樹　教頭

Ⅱ　成果と課題

1　成果

- 専門性の融合: 小学校・中学校の教員が共に学ぶことで、学年や教科を越えた多岐にわたる実践報告を共有でき、互いの専門性を生かした授業改善の方向性が見出せた。
- 系統的な理解: 小学校の実践や計画を中学校側が知るなど、義務教育を通じた子どもたちの成長を多角的な視点で捉える貴重な機会となった。
- 明確な設計指針: 「身に付けさせたい力」を起点とし、ICT端末等のツールをどう活用するかという、具体的かつ効果的なカリキュラム編成の考え方が浸透した。
- 統一的な研究視点: 研究の柱（3つの視点）を明確にしたことで、多様な実践の中にも統一感が生まれ、1年間を通して一貫した検証が行われた。
- 端末活用の有効性: 1人1台端末を活用することで、児童生徒への即時フィードバックや他者参照（考えの共有）が可能になり、学びを深める有効な手段であることが再確認された。

2　課題

- 部会員の確保: 少人数でアットホームな良さはあるが、学びの幅を広げるためにも参加人数を増やす必要がある。
- 授業者の偏りの解消: 特定の教員（授業者）に負担が集中している。担任外やこれまで未経験の教員も積極的に実践発表を行うなど、多様な実践事例を募る体制づくりが求められる。
- 単元を通じた変容の可視化: 1時間の授業報告にとどまらず、カリキュラム編成の視点から「単元全体でどのように改善・変容させたか」を明確にする必要がある。
- 「自走する学び」への転換: 「教師がさせる」授業から、子どもが自ら問いを持ち、教師が伴走するようなPBL（課題解決型学習）や総合的な学習の時間の研究をさらに深めたい。
- 視覚的な資料の活用: 実践発表の際、モニターの活用や写真・動画の共有を増やすことで、授業の様子をより具体的にイメージしやすくする工夫が必要である。
- 具体的な手法の習得: 子どもにとって「わかる授業」を実現するための、具体的な授業手法やツールの活用ノウハウをさらに蓄積・共有したい。

（部長　鶴田真紀子）

教育評価研究会

「生きる力」をはぐくむ評価のあり方

Ⅰ　主題設定の理由

本部会ではこれまで、子ども達に『生きる力』をはぐくむため、子どもの学ぶ意欲や学びの過程、学びあう人間関係づくりを大切にし、社会に出て生きる力につながる『ゆたかな学び』を保障していくことに焦点を当て教育研究活動を進めてきた。子ども一人ひとりの『ゆたかな学び』を保障するためには、各学校における児童・生徒や地域の実態に応じた教育課程の編成・実施や、それに伴う指導法の工夫、指導の振り返りと改善、適切な評価と支援など、様々な重要な要素が考えられるが、本年度も日常行っている評価を見直し、児童の学び・変容を丁寧に見取り、具体的・積極的な評価を行うことで次の学習活動への意欲を高め、確かな学力の定着をいっそう図りながら『ゆたかな学び』を保障していきたいという考えにたち研究を進めてきている。

Ⅱ　研究の内容

1　研究の方向性

一枚ポートフォリオ評価、ICT活用、またポートフォリオを使った指導と評価の一体化を目指した研究を進めていきたいと考え、授業実践の報告・検討を中心にして、評価方法を検証し確認する。

2　研究授業

令和8年1月28日（水）に三枝　英太郎先生（塩山北小）の国語科「想像力のスイッチをいれよう」の研究授業を行った。

3　理論研究

学習会で一枚ポートフォリオ評価とICT活用の関わりについて学び、その学びを基に多教科に関わったOPPの実践を出し合い、研修を深めた。

Ⅲ　成果と課題

1　成果

・「生きる力」を育むため、スプレッドシートは単なる記録用シートではなく、「思考のツール」として機能させることが大切である。そのために、学習のめあて、学習内容、振り返りなど1枚に蓄積されることで、児童が「前回の自分」と比較し、成長を自己実感できることがわかった。

・長年積み重ねてきた研究が毎年進化している。ルーブリックを教師、児童間で共有しながら学習を進めるスタイルが、今回の研究授業でも実践でき、児童が目指すところを明確にすることができた。

・研究を重ねる中でOPPシートが進化し、統一授業研や実践発表を行う中で、様々な児童への評価法を知る研究や実践ができてきている。

・OPP シートを活用することで、児童が抵抗感を覚えずに課題について深く考え、整理しながら自らの思考の変化を振り返ることができた。それが児童の思考力を高めるだけでなく、客観的な評価にも活用できる素晴らしいツールであることがわかった。
・スプレッドシートの OPP シートが振り返りだけでなく、単元計画や単元を貫く問い、ルーブリックの共有、評価を一体化して活用できることがわかり、それが大変有効的であることが検証できた。
・より多くの OPP シートの活用法を知ることができ、大変勉強になった。児童を正確に見取るために有効だった。

2 課題
・教師が OPP シートを児童の支援や指導に生かす目的で活用していくが、児童が自走する授業では、各々の児童を細やかに見取り、それに合った支援をしていく必要がある。児童の記述量が多いのは嬉しいことだが、そこから何をどう見取るのかというところが難しいところだと思った。
・授業実践してくださる先生のハイレベルな授業に、感動した。しかし、低学年の場合、どのように授業をすれば良いのか、もっと授業実践発表などさらに学びたいという気持ちも大きくなった。
・紙のOPPシートは、研究会で紹介しあうなかで共通の型を使っていたように思う。スプレッドシートなどについても研究会として共通の様式を作成できると、研究が他の先生方に広がっていくのでよいと思った。
・OPP シート（スプレッドシート）を共有し、児童の実態に応じて、評価についてもっと研究を深めることができるとよい。
・デジタルの OPP シートについての形式を共有するために、形式について話し合っても良かった。
・他の研究会の先生方が一目見ただけで使い方がわかるように OPP シートをフォーマット化し、部会でブラッシュアップを図れるとよいと感じた。

3 今年度の研究で確認できた実績
・「生きる力」の核心を「自らの学習を客観的に捉え、改善していく力」とし、それを一枚ポートフォリオで可視化することができた実践となった。子ども自身も、客観的に自分自身を見ることができていて、振り返る力が育っていることも感じられる授業実践であった。
・児童が学び方を自ら選択し、他者参照をしながら思考を深めるためにも一枚ポートフォリオやスプレッドシートの有効性を実感することができた。
・国語科の学習として、筆者の主張をただ読み取るだけでなく、読みの前後で記事を読んだ感想を書くという体験を入れることで、筆者の主張を実感でき学びが深まる。自分が書いた文を読み比べることで自身の成長を意識することができるということもわかった。
・今年度もICT端末の活用とポートフォリオ評価を活用した児童の実態把握に基づいて、授業づくりを組織的に行うことができた。

（部長 高野 恵美子）